
そして少年は引き金を引く。

七海洋平

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そして少年は引き金を引く。

【Zマーク】

Z3616C

【作者名】

七海洋平

【あらすじ】

特殊部隊の少年。仲間と共に戦い成長する。撃つことを躊躇いながら。泣きながら、苦しみながら、殺す自分を憎みながら、敵と戦う。そして少年は引き金を引く。

第1話 狙撃手

ざああああああ
……

「残り12…」

激しい雨が降る田の半壊した3階建ての建物の中で赤い髪をした男が咳いた。

年齢は10代の前半に見える、

背も小さく男と言つよりは少年と言つた方がしつくいく。
近くには20代の青年もいる。

少年と青年は観測手もつけずに軍用の遠距離狙撃用ライフルのスコープを目につけジッと眼下に広がる廃墟を見据えていた、
回りにはキラキラとひかる真鍮製の空薬莢が散らばっていた。

少年はその幼さの残る顔におよそにつかわしくない悲壮感に満ちた表情をしている。

テロリストとの比較的大規模な戦いが終了し2日、残党狩りにかりだされた人間は、自軍にこれ以上の被害が出ない用にと特殊部隊が選ばれた。

もし外した場合、弾丸の着弾点で軌道がバレる。着弾点は狙撃手の居場所を敵に教えてしまう。そのため狙撃に秀でた者が狙撃手をやらないと殺される可能性が非常に高いからと言うのがその理由だ。それにくわえ冷静な判断が出来ない者が狙撃を行えば外した後に音を気にせずに撃ち、標的を消してもその仲間に殺られる事になる。

第2話　涙。

「残り8…」

少年は雷の音や標的が出した発砲音に自分の発砲音が紛れる用に細心の注意を払つて確実に敵の頭に弾丸を撃ち込んでいく。

少年の頬を涙が伝う。

「ごめんなさい……『タン！カチヤン。』『ごめんなさい、『タン！カチヤン。』許して『タン！カチヤン』『

少年が泣きながら引き金を引き、

ライフルが『タン！』と乾いた軽い音を出す度に、螺旋の軌道を描いて音速を越える銃弾が発射され、遠くでピストルを構えて辺りを警戒しながら進んでいた敵兵士の頭を撃ち抜き地面を紅く染めた。

他の音に紛れる為に仲間の死に気付く者は少ない、そして、大抵は気付く前に地面を紅く染める。

少年には、

銃身に弾を送り込むポンプの軽さも、引き金の軽さも、

全てが命の重さを笑つていてる感じられた。少年は散らばつた空薬莢を腰の麻袋に入れると、ポイントを移動しようと立ち上がった。

「ンッん~、ン~、フフーン 残り8発」

銀髪の青年が戦場にはどう考へても合わない鼻唄を歌いながら戦いに生き残つた敵の兵士を撃ち抜いていく。

「ん〜 バイバイ『タタタン！』 来世ではきっと幸せになつて
ね、さて、残り5人」

青年の銃には弾丸を送り込む為のポンプが無かつた、
一瞬で3人の命を刈り取つたその銃は青年の腕に抱かれ、黒く、鈍
く輝いていた。

「ふ〜、ツカレタ：おつ？ アイツも移動かあ」

青年は少年を見て微笑んで少年が腰の麻袋に空薬莢を入れ終わるの
を待つた。

第3話 移動中

「よつ」

青年が空薬莢を麻袋に入れ終えて振り向いた少年に声をかけた。

「…アルさん、もう終わつたんですか？」

アルと呼ばれた青年は首を左右に振つて答える。

「んーにや、ポイント変えようと思つたんよ。ハル君もだろ？」

少年、ハルは頷く。そのすぐ後、

アルが何かに反応してスコープを覗き、少し驚いた顔をしてその場で銃を構えて、そして撃つた。

苦い顔でハルを見て、言った。

「まだ生きてたぞ、相手には出来る限り苦痛を与えるな。」

アルは鼻唄を歌つている時の顔でも、

ハルに話しかけた時の優しい顔でもなく、

どこか悲しそうに、ハツキリと言つた。

ハルはアルの蒼と赤の双眼に見つめられ、泣きそうな顔になつた。

アルはハツとして

「おつと、ごめんさ。ちょっと俺もピリピリしてつたから。」と誤魔化した。

苦笑いした青年は

先天性白皮症と後天性の虹彩異色症を併発している、

そのため、日本人だが真っ白な肌に銀髪、右目に蒼い瞳と左目に赤い瞳を持っている。

軍の中でもかなり珍しい存在だ。

そして虹彩異色症が発症した時に、

原因はわからないが耳が異常な程敏感になつたらしい。

因みに右目は虹彩異色症になつた時に色盲になつてゐる。

「さつきは音を気にかけることが出来なかつた。アイツ無線機を握つてたぞ。早く動こう。」

少年は目を伏せて済まなさそうに

「はい。」

とだけ言つて黙り込んでしまつた。

次のポイントまでの道のりが随分遠く感じじる。

「ハルって本名なん?」

沈黙を破るいきなりの質問にハルは少し驚いた後に、

「違います。……アルさんは本名……じゃありませんよね?」

違う。とだけ言つて本名を教えなかつた所をみると、言いたくないらしい。

「おうよ、アルなんて名前の日本人なんているわけないっしょ。

アルってのは先天性白皮症から来てんの。」

アルはそんな事を気にせずにハルの質問に答えた。

ハルはアルに顔を向け不思議そうに

首を傾げる。

「どういう意

「アルビノ、白皮症の学名だよ。

それで、アル。アルビーナ＝オッド。

オッドってのは虹彩異色症、

つまりオッドアイから来てんの。ちなみにコレ、逃しちゃつた外国の敵サンにつけられた有難くない名前。ま、戦場で本名使つよりはいいから使つてる。じゃあ、何で髪赤いの?もしかして染めた?」

ハルは少し戸惑つた後

「血で…染まりました。元々は黒です。」

と言つた。

「わらい」

「いえ」

また会話が途切れ、2人は静かに歩いた。

第4話　連絡

氣まずい雰囲氣で次の狙撃ポイントまで歩いてくると……
ピリピリピリ。

2人の通信機極小さな音で同時になった。

反射的に肩の位置にあつた通信機に手をかけ応答する。

『帰還を命じる！今すぐ戻つてこい、お前達を失う訳にはいかん！
！！北の門を出てなるべく離れろ！……』

通信機から部隊長の

「おっちゃん」の声が響く。

「了解」

アルはすぐに反応し、ライフルを肩に担ぎ

ピストルを腰のホルスターから抜いた。

「ハル君、帰るよ。」

兄が弟に声をかけるように

極自然に呼んでポカーンとしていたハルの手をとつて走り出した。

「何があつたんですか！？」

「さ～ね～、けどおっちゃんがあんなに焦るからには結構ヤバいか
なあ？とにかく逃げるよ、後ろ乗つて！」

ビルの外には隠すようにバイクが置いてあつた。

マフラーには見慣れない装置がついている。

「なんですかそれ？」

「最新のサイレンサー、バイクで隠密行動が出来るくらい静かに走
れるんだ。」

速度は出ないけど、そういうやハル君はへりからのロペリング降下班
だから知らないんだううね。」

アルはそういうとピストルをバイクにむけマフラーにつけていた装
置を器用に撃ちおとし、エンジンをかけた。

爆音が辺りに響き渡る。

「いいんですか！？」

後部座席にのつたハルがエンジン音にまけない用に叫んだ。

「備品の破壊も音も緊急事態だから問題無いよ。いくぞ、」

アルは北門に向かつて最大速度でバイクを走らせた。

第5話 脱出・帰還

街を出て30秒。バックミラーには爆発炎上して黒煙を盛大に噴き上げながら炎に包まれている街が写っていた。

「……敵さんは派手好きなのかな？どう思う？ハル君」「アルはそう軽口を叩いたが笑顔が微妙に引きつっていた。

「……本部に帰りますよ。アルさん、本部長に早くお礼を言わなきや。通信機、僕のもアルさんのも壊れています」

「おッ、ホントだ。確かに今日の雨は酷かつたけど、防水が甘いな」「開発部に文句言わなきや。よつしや、じや、家に戻るか。とばすからしつかり捕まつててね。」

2人は雨の中真っ赤に燃えている街を後にして「家」へとかえつて行つた。

「アアツツ……」

ついさっきまで居た街とはうつてかわつて晴れわたる空の下、小回りのきく、大排気量のバイクにしては小型のオフロード車に乗つた2人が高速で走つている。

「何kmぐらいだつけ？」

運転手の青年、アルは後部座席に座る少年、ハルに主語の無い質問をした。

「本部から今回の任務地は約350kmです。出発から大体2時間たちましたから残り後150kmぐらいですね。」

ハルの答えにアルは渋い顔をする。

「そつか、まだ遠いね、迎えが無いのは知つてたけど……キツイなあ

……アル君、ちょっと休憩していい？ほら、あそここの木の陰でも。

「アルが道端に生えていた大きな木を指差した。
顔は見えないが疲れた声で聞くアルにハルは
「ええ、了解です。」

と休憩することを快諾した。

「ありがと、じゃあ停めるよ。」

そう言うとスピードを緩め木陰に停まった。
停めたバイクの荷台に縛りつけた鞄を
ゴソゴソと探つているアルを立つたまま不思議そうに見ていたハル
にアルは

「先座つてて。」

とだけ言つて荷台の鞄を探り続けた。

第6話 休憩～大きな木の下で～

木陰に座つたハルは
「ふー。」と息を吐いて目を瞑つた。

「コーヒー飲む？」

目を瞑つていたハルが
目を開けるといつの間にかコーヒーとコーヒーに入れる為の砂糖、
クリープ、お茶菓子のクッキーがだされていた。

「……ドコにそんなもの持つてたんですか……？任務地に不要な物を持つてい

そこまで言つてハルはいきなり言葉を切つた。
その目の前には今まで見た事が無いような、
恐怖を感じる笑顔を自分に向けるアルがいた。
「不要な物つて何かな？」
と言つたきり何も喋らないアルが持つステンレスのカップが目に見えてたわんでいた。

「す、すすすみません、頂きます！！！」

慌てて自分の前に置かれていたカップを掴んで
それが自分の命であるかのように握り締めた。

「うん。どうぞ、あ、クリープでも砂糖でもお好きにどーぞ。あと

クッキーも！」

そう言つたアルの顔からは先程の恐ろしい笑顔が消え去り
心の底から笑つていてるような無邪気な笑顔を浮かべていた。
「ふ〜、幸せだな。コーヒーはなんでこんなに美味しいんだろう
ね、ねえハル君？」

「そうですね、…どうしてでしょうか……。」

ひきつった笑顔で短く返事を返したハルは、
アルと親族の様な親しい会話をしていた事を
後悔したような顔で、

わざと他人行儀な口調で話題を替えようとアルに話しかけた。

「アルさん、同じ部隊の人間として、アナタの事を少し詳しく知り
たいのですが宜しいでしょうか？」

第7話　過去

「あ、そうか、

ハル君はうちに入つてまだ3日だつたつけ？

引越しとか色々あるのに入つてすぐ任務なんてついて無いよね~、
よし。じゃあプロフィール紹介しようかな！え~… 身長は

「あ、それは知つてます。

部隊長に貰つたプロフィールに書いていた事は覚えています。

身長186cm 体重70kg 血液型はB型

先天性白皮症と虹彩異色症を併発、聴力が非常に優れていて優秀な
狙撃手として活躍していると書いていました。

アルはハルの記憶力の良さに驚いた顔をしてハルをジッと見ていた。
その眼を正面から見返して

「僕はアナタが軍に入った理由が知りたいんです。

そして僕が入つた理由を知つて貰いたい。」

不安そうな、真剣な表情で、

ハルはハツキリと言つた。

「うい、」

アルが場にそぐわない軽い返事をした。

「俺はちっちゃい頃おっちゃんに助けられたん、
だから今度はおっちゃんを助ける為だけに軍にいる。」

それだけ言つたアルは遠い目をしている。そして休憩を初めて5杯
目の「コーヒー」を飲み干した後、

無言でハルが話始めるのを待つた。
そのことに気付いたハルが話始める。

「…僕の育て親はテロリストだったんです。だけど僕はその行動に疑問を持っていました。

ある日、あの人たちは不意に突入してきた軍の兵士に僕の目の前で撃ち殺されました。

その作戦の指揮をとつていたのが部隊長でした。

僕はあの時一緒に撃たれていてもおかしくなかつた。

だけど部隊長は僕を引き取つて育ててくれました。

そのお礼がしたくて、僕は反対する部隊長に頼みこんで狙撃の訓練を受け、部隊に入つたんです。

名前は陽菜、春に陽を浴びた菜の花のように、強く美しく育つようにならしくです。部隊長がつけてくれました。

だから僕は、悲しい思いをしてでも狙撃手を続けます。」

少し驚いた顔をしたアルを見て、ハルは泣きそうな顔になつていた。絆ができてしまう前に、自分が幼い頃、敵に育てられていた事を自ら話したが少年はアルに、

自分に対して良くしてくれた人に、嫌われるのがやはり辛いのだろう。

そんな少年を見てアルは静かに笑つた後にスッと右手を差し出し、言った。

「じゃあ、おっちゃんに恩があるどうじ、仲良くなつないほれ、握手握手。」

予想外の言葉に驚くハルの手を取つて力強く握手を交した。

第8話 家に帰れり。

アハハ、と嬉しそうに笑いながら握手した手を上下にブンブンとふるアルに状況をうまく理解出来ず、目を丸くしたハル。端から見ればどこまでもシユールな光景だ。

「どうして…？」

ハルが呟く。

「ん？ 何が？」

本当に何がかが解らないアルが聞く。

「どうして僕を嫌わないんですか？」

僕は敵に育てられてたんですよ……

危険思想のテロリストにもしかしたら敵討ちで部隊を内部から壊そうとしてるかも知れないんですよ？」

いつそのこと隠さずに嫌つてほしい。

そう思い震える声でハルが尋ねる。

「おつちゃんが言つてたよ、『陽菜は優しい子だ。』ってさ、それに昔なんて知んないし、今君は仲間だ。

俺が君を、嫌う理由が何処にある？」

アル笑いながらハルをビシッと指さして答え、自分のカツプに6杯目のコーヒーを、

空になつていたハルのカツプにも2杯目を注いだ。

「さ、長話して疲れたつしょ、これ飲んで出発しよ。」

通信機壊れてるから家に連絡してなかつたし、早く戻らないと俺たちの葬式が始まつちやうよ。」

「えつ！？ そなんで

「まあ冗談だけど。あ、あと任務地で話した時から言おつ言おつとい

思つてたけど、出来るだけ敬語は辞めてね。」

戦場が職場の人たちには笑えない冗談をとばし、相変わらずの笑顔でアルが言った。

「はい！」

アルの笑顔が移ったような嬉しそうな笑顔でハルが言った

「こら」

「あ、すみませ…や、違つ。ごめんなさい。」

「ん…まあよし」

木陰からオフロードバイクが走り出した。

それに乗っていた2人は、戦場の悲しみを払い除けるような明るい笑顔をしていた。

第9話 帰宅

「やつと…やつと着いたよ。

予備燃料多めに持つといて助かつたよホント。

まさか途中で補給出来ないとは…たどり着けてよかつた。」

アルはげつそりと疲れた笑顔をしている。

「大丈夫？」

「ヤバいかも。」

所属している特殊部隊「world protection me
chanism」の本部の前で、
そんな会話を交わす2人。

本部の建物はそれほど大きくはなく民家が6つ連なったような物がある程度だが、

庭は模擬訓練をするためにかなりの広さがある。

部隊に所属する者は

「家」と呼んで慕っている。

いきなりドアがバン！…と開いた。

「アル…！アルじゃない…と確かハル君…！遅いわよ！心配した
のよ…！？」

家から飛び出してこっちに走って来たのは精悍な顔立ちで、
カーニパンツにTシャツというラフな格好をした少女だった。

「おー！モモー。」

両手を広げてモモと呼ばれた少女を抱き上げたアル。

「心配かけてゴメツ…！…んなあ…！…？」

ミシイ…

隣でその光景をポカソんて見ていた

ハルには骨が軋む音が確かに聞こえた。

「ちよつ！待つ、ゴメン！－タンマ、話を！話を聞いて！話……」

アルがぐつたりとして動かなくなつた。

「……アルさん？」

返事が無い、ただの屍のようだ。

「ふー、とりあえず気がすんだ。さて、『ついでに2人目いつとくかあ』。

氣を失つたアルとは対照的なすがすがしい顔でモモはハルを見た。ハルには少女が『ついでに2人目いつとくかあ』 そう言つたのが確かに聞こえた。

「ハル君、なんで帰るのが遅かつたか教えて貰えるかしら？
3秒以内に！－！」

モモはハルに、『コーヒーを『余計な物』扱いした時にアルがした笑顔と同じ顔をしていた。

「2…1…」

「ひつ…」

「0…タイムオーバーね…残念だわ。本当に。」

モモに抱きすくめられたハルの体に少しづつ力が込められていく、

「うつ…」

短い悲鳴を上げて全身から力が抜けた。

2人を気絶させたモモは

「ん〜〜！よし！おじさんのトコまで引っ張つてくれかあ！」

満足気に伸びをした後、清々しい顔で2人の襟を掴み、ズルズルと家の中まで引っ張つていった。

第10話 本部長室で

ズルズルズル……

家の中で2人の人間を引きずつて歩くモモとすれ違った人は別段驚くわけでもなく、

「おっ、アルと新入りの子、戻つて来たんだ。」と言つたり

「家族を絞め殺すなよ。」などと冗談を言つたりした。

2人を散々引きずつて歩いたモモは「おっちゃん（ＷＰＭ本部長）」と書かれたふざけた標札が吊り下げる部屋にノックもせずに入つた。

「お疲れ様。アル、陽菜。」

「…私は？」

「心配だつたのはわかるけど、次からはもつと優しくね」

そう優しく言つた初老の男性は読んでいた書類から顔をあげた。

「…はい。」

少女は有無を言わさずアルとハルを絞めあげた少女と同一人物とは思えない程、素直に頷いた。

「まあ氣絶した人から報告を聞くわけにもいかないし、2人を医務室に連れていくてくれないか？」

「その前に聞きたいんだけどいい？」

「なんだい？」

「おじさんの部屋から怒鳴り声が聞こえたんだけど……なんで？」

渋い顔をしてから少女を見つめ、諦めたように首を振り

「……任務地だった街がまるまる爆発したんだ。テロリストの多い街だったから何年も前から少しづつ地下に埋めていたんだろう。比較的小型の物を、噂もたてない用に、慎重に。そして個人の避難用と称した地下シェルターにかなり大型の物を。

「彼」が戦いの中でたまたま地面に露出していた物を見つけなけれ

ば、最悪の事態も有り得た危険な状況だった。」

と、詳しく説明した。

「……情報が……足りなかつたのね？」

モモは驚いた顔をした後にTシャツの裾を握り締めて静かに泣いた。

「まつたく。何年もかけて自分の街に爆弾埋めるなんて変なヤツらだよなあ。一般市民だつた人には気の毒なことだよ、ま、テロリストの方が多いような街だつたけど……普通何年も前から地面に埋まつてた爆弾の情報なんて

ある方が变なんだつて、わかるヤツなんていないよ。

そんな事に责任感じるくらいなら、

帰つて来てすぐ人を氣を失うまで絞めあげた事に责任感じてよ。」
いつの間にか目を覚ましたアルが座つたまま腰に手を当てて伸びをしながら言った。

「おっちゃん、後で報告書出すから医務室行つていい？」

「そうしなさい。ああそれと

「彼」もいつも通り医務室にいると思つからお礼をね。」

「了解。あんがと。それと、通信機越しでもハル君ビビつてたから、ま、一応報告ね。」

第11話 移動→医務室

短く言葉を交わすとアルはハルを背負つた。そして下を向いて泣いている少女を

「よつ…ツヒ」

「ひや…?」

優しく抱きかかえた。

「え? アル? 私は、え?」

完全に混乱した少女にアルは

「女性が泣いている時は紳士的に、優しく。これ常識。」「何故か片言で言つた。

「ふいー、重かった。おっちゃんの部屋から医務室つてこんなに離れてたんだね。」

背中のアルはまだうなされていた。

「ついたんですか? ていうか重いって... 酷くないですか??」

医務室の前で青年に抱えられていた少女が言つた。

青年に抱きかかえられている状況が恥ずかしいのか顔を手で覆つている。

今までと違い何故か敬語だつた。

「ああごめん、多分、任務地からバイクで帰つて来てすぐに絞めあげられたから重く感じたんだよ。」

青年は笑いながら皮肉っぽく言つた。

「.....ごめん。」

「アハハ、冗談だよ。さて早く治療済ませて書きたくない報告書

を書い寝るか……」

「……」めん。」

「冗談だつて、多かれ少なかれどうせ書くんだじ。よつ……と」

アルは行儀悪く足で医務室の扉を押し開けて中に入った。

「あらあらあら、若いっていいわねえへ、任務から戻つて来てすぐ彼女を抱っこして医務室までベッド借りに来るなんてへ。」

白衣を来て椅子に、ダラッと座つて眠そうに煙草を吸つている女性がいた。歳は20代後半ぐらいに見える。隣には大きな止まり木があった。

「な～に言つちやつてんのさ姐さん。ほれ、背中見てみ背中。」

そういうとアルは振り返つた。

第1-2話 医務室で

「あら、陽菜君じゃない、……もしかしてその若さでヨローハムがにお姉さんそれはトメルよ?」

「アルおひして、」
「あい」

アルの腕からトンツと降りたモモが女性に向かってスタスターと歩き、目の前で止まって耳元で囁いた。

「あ~…なんだか頭がいたいなあ…お姉ちゃんが変なこと言つたせいかなあ…」そのままだとボーッとしてつまづいてお酒の棚に突っ込んだじゃしゃん…」

「さあ治療を始めるわよーー陽菜君ねー?早くベッドに寝かして、早くーお願いだからーー!」

女性はかなり焦って準備を始め、少女はアルに向かって笑いかけた。

「アル、あなたもよ。」「いや、今回は曇つてたから問題ないよ。」「帰り道はかなり太陽が照つてたハズだけど?てかいいから座れ。」「そういえばカケルは?」「出かけてる。そんなんで話題がそらせると思つてんのが、いいから座れ。」「…はい」

女性は手に持った怪しい色の液体が入った注射器をアルの腕に突き刺した。

「いやー、けど毎度毎度凄いね、狙撃手とはいえ擦り傷もないんだもんねえ。」

嬉しそうに言う女性に

「……体がダルい、」

恨めしそうにアルが言った。

「私のせいじゃないよ。寝たら治るからさつと寝ちゃいなよ。」

「姐さんとモモがいる所で寝るの怖がフウ」

腹部を一人に強打されたアルが情けなく倒れた。気を失う前に最後の力で
「血筋の問題ですか…………？」
とだけ言って。

第1-3話 医務室で

田を覚ましたハルの寝惚けた耳に聞きなれない声が聞こえた。

「ね、モモ。お姉ちゃんさつきふと思つたんだけどね、若いね！…！最近の隊員はどうしたんだりうね！…！」

「いや知らなによ。てかココにいる隊員がお姉ちゃんより若いだけじゃない、いいじゃん別に。」

「よくないよ～、このままだと私その内『長老』とか言われるよ…？いいの…？愛する姉が長老でもいいの…？」

「愛してないし、お姉ちゃんより歳取つてる人いつぱい居るし。けどいいじゃない。長老、カツコいよ。長老」

「長老違つー間に聞かれたうづすんの…！アルは熟睡（気絶）してゐけどそろそろハル君が起きるんじやな…」

「……おはようござります、長老。」

寝惚けたハルはいきなり地雷を踏んだ。

「…………」氣まずい沈黙の後でモモが一人、笑いを堪えていた。一方頭が徐々に覚醒してきたハルはだんだん焦つてきた。

『……なんだれつ』の沈黙は…僕はさつきなんていつたつけ？

長老？

誰が？

もしかして渚さん？

……あ、正解っぽい。ドウシコカ、顔に出してないけど怒ってる、凄い怒ってる、メッチャ怒ってる……背後に何か見える。

謝ろう、そうだ、全力で謝ればまだ間に合つ……希望を捨てちゃダメだ……！」

「あの……渚さん……すみませんでした……僕、その……ちょっと寝惚けてて」

「ハル君、お腹減ったでしょお？これえ食べてみてえ？」

妙にまとわりつく様な猫撫で声でそういうと部屋の端にあった冷蔵庫からラップのかけられたケーキとフォークを取り出した。その時少女が笑いを堪えるのをやめて驚いた顔をしていた事にハルは気付かなかつた。

第14話 ケーキ

「…………頂きます。」

ハルは、寝惚けていたとはいえ、まだ若い女性を長老扱いして断わる事が出来ない空気の中、あからさまに不安そつた声で承諾した。

「食べさせたげる」

「…………できれば自分で食べ」

「食べさせたげる」

「…………お願こしまか」

これ以上無いほど不安な表情をして、目の前に差し出された見た目は完璧なケーキを食べるため口を開けた。

パク……

「…………?（辛い！？いや……スッパイ？苦い……？す）」
「辛い？」

「辛スッパ苦甘い！？」

「美味しいかしら？」

「あの……とて、も……前、衛的な味だと、思、いま……す」

「涙がめっちゃ出てるわよ、ねえモモちゃん、泣いてるよ~ビーす

る~」

「…………」

ソッポを向いた少女はとても不機嫌な顔をしていた。

「あ～、マシになつたあ～……つてハル君なんで泣いてんの！？ツい！～？」

起きてすぐハルが泣いていることに気付いたアルは驚いて一口分だけたケーキを見てさらに驚いた。

「そそのケーキはまさかモモさんがその、つ、作つたその…アレですか？」

モモをさんづけにして、かなりどもりながらアルは聞いた。

「そう、食べる？」

そう聞かれたアルはいきなりガバッと布団を被つて

「……すいませんお腹痛いのでマジで勘弁してください。」

と言つたきり動かなくなつた。

「そんなに酷いかなあ…」

少女がボソッと呟いた声に対して医務室の女性、渚はハッキリと言つた。

「いや～、かなり酷いと思うよ？まずスペックがお菓子より兵器向

きだし、偽装はバツチリだし」

第15話 白衣の悪魔へ脱出へアルの部屋

薬とアルコールと煙草の臭いがする医務室の中に4人。

静かに泣いている少年が1人と布団にくるまつて震える青年が1人、楽しそうに笑っている女性が1人、その女性を不機嫌そうな顔で半ば睨む様に見ている少女が1人。

「とりあえずコレ飲んどいて。」

渚がハルに錠剤の瓶と水の入ったペットボトルを投げ渡した。

「なんの薬ですか？」

泣きながらもしつかりと薬を受け取ったハルがまた不安そうに聞く。「さあ？ なんの薬だろね？ けど早く飲まないとヤバいかもよ？ まあ今回のコレはどんな被害が出るかまだわかつてないからとりあえず前に作ったヤツだけど、前はたしか……軽い幻聴だったつけ……？ 後は吐き気か、吐いた人はいなかつたけどね。医者の私に言わせれば吐き気があるのに吐かないって逆に怖いよね。」

ケーキを見ながらヘラヘラと言った女性はまだ楽しそうに笑っていた……。

（夜）アルの部屋（1LDK）

「まだ気分悪い？」

傷や病を癒すための部屋での恐怖体験の後遺症を心配するアル

「ありがと、だいぶマシになりました。」

ハルは先輩にあたるアルの気遣いに感謝しつつテーブルに置かれたコーヒーを少しずつた。

「うん、よかつた。また食堂のおばちゃんにもうモモには厨房を貸さん用に言いに行かなきゃなあ……死人がでる前に……」

「冗談になつてない」冗談に自分で苦笑いしつつ3杯目のコーヒーを自分のかップに注いだ。

「モモさんの部屋つてキッチン無いんですか？」

「おひちやんが使用禁止にしてる。ちょっと前にえらい事になつてね……。」

眉間にわざわざくつむくアルの顔は微妙に青白かった……。

第16話 続・アルの部屋～明日の予定～

「そ、そうだ！－アルさん、明日予定ありますか？」

重くなつた空気を変えるようにハルが聞いた。

「あ～、うん、特に無し。ひと仕事終ったしね、ハル君どこか行きたいとこあんの？」

「ガンスミスのおじいさんの所に行こうかなって思つてるんです。ここに来る前に自分の部屋で電話で頼んじきました、ついてきてくれますか？」

「あ、じいちゃんの『銃工房』か。そだな、忘れてたけど俺も銃みて貰つた方がいいかもなあ。明日の何時？」

「朝の7時に行くつて言いました。」

「...了解。ほんじゃ 6時40分に公園の噴水前に集合ね、バイクで送つたげるから。... ハル君、じいちゃんト行くの初めて?」

「ありがとう。うん、仕事場に会いに行つたマートはあるナビ整備頼みに行くのは初めて。」

「成程……朝ごはん、あんまり食べない方がいいかもよ」

「へ、どうですか？」

「ん~?じいちゃんとおっちゃんが趣味で作った特殊な訓練機が工房の地下にあるんだけどね、体质にもよるけど初めは結構キツいんだ、酔うって言うかクラクラするって言うか……俺も初めての時はヤバかったしね……」

アルは昔の

「ヤバかった」時を懐かしむように手を細めた。

「……ここは変わった人や変わった物が多いですね……。」

「楽しいでしょ?」

自慢気に笑い、首を傾げながらアルが聞いた。その問いに

「はい、とても。」

ハルも笑いながら答えた。

第17話 続・アルの部屋へ予定決定、おやすみ。」

「気に入つて貰えてよかったです。あ、そんで明日の話だけどさ、ハルくんて銃いくつ持つてる?」

「3つです。狙撃銃1つと携行性重視で選んだ拳銃が2つ。あ、それとここに来る前から作つてた自作の銃が造りかけで部屋に1つあります。」

「へー!自作!…器用なんだねえ。どんなの?」

「どつちかつて言えば威力を重視しました。重量を少し重くして発砲時のブレを小さくします。近接戦闘にも対応できる用にした拳銃です。」

「近接戦闘かあ、俺苦手なんだよなあ…明日ちょっとだけ訓練しそっかなあ?手伝ってくれる?」

「いいですよ。実践ですか?」

「実践…て言つのかな?さつき言つた特殊な訓練機使つてさ。」

「ああ、どんなのなんですか?その訓練機。」

「ん~…簡単に言えばバーチャル空間で訓練をする機械なんだ、椅子に座つた状態で頭が体を動かそうとする電気信号を機械が受け取つて電腦空間のその人物を動くことの原理が…?…………だあーーーもう無理だ!…!…!」

頭をガリガリと掻きながら説明を放棄した。

「……難しい原理なんですね…。」

説明を途中で放棄したアルを慰めるようにハルは言った。

「それよつむ、明日は造りかけのも含めてさ銃全部持つて行こいつよ。じいちゃんならいにアドバイスくれるよ。」

アルはもう特殊訓練機の説明を完全に諦めて話題を変えた。

「そうですね、そうします。といひでアルさんはいくつ銃を持ってるんですか?」

「6つ、それぞれタイプの違う狙撃銃が3つに拳銃が2つ、あとちよつと変わり種が1つ。」

「変わり種?」

「明日見せたげる。ま、楽しみにしててよ。」

アルは歯を見せて

「につ」と笑い、ハルは『変わり種』について色々と考えている。

「んでさハルくん、時間大丈夫なん?明日は休みだからいつもよりはゆっくりだけどそろそろ寝た方がよくない?」

時計を見ながら言つ。

「うわつーもうこんな時間!/?ああじゃあもう失礼しますー今日は

お疲れ様でした！！

「あいよ、また明日」

アルはひらひらと手を振つてハルを見送つた。

翌日

6時25分～公園噴水前～

抜けるような青空の下、眼帯をつけたアルが噴水の近くにある一際大きな木の影に座つてタバコを吸つている。

近くに停めてあるアメリカンのバイクには3本、狙撃用ライフルが立てかけていて、後ろには大きなバッグが付けられていた。

「ふ～、もうすぐか。準備運動でもしどつかね～…。」

そう言つて短くなつたタバコを携帯灰皿に投げ入れて伸びをした。

6時30分～公園噴水横広場

「ほっ、ほっ、つせい！」

噴水横の公園は50m×80mと広い。だいたい半分のスペースを使つて遊具が適度な間隔で20程設置されていて、残りの半分は芝生が全体に敷詰められた広場がある。

アルが遊具の中に当然のように混ざつてしている吊り下げ型のサンドバッグを軽く殴つて運動をしていると

「お～い！～アルー！朝っぱらからにしてんの～？トレー二ング～！～？」

300m程離れた家で窓から身をのりだしたモモから声がかかる。

「あ～おはよつ。準備運動だよ。」

アルが自分の感覚で返事をすると。

「え～…? なに～…? ?」

当然のように大声で聞き返された。

アルは息を吸つてから田をつぶつてから

「じゅ・ん・び・う・ん・ど・づ!…!…!

大声で返してから田をあけて窓を見た。そこには既にモモの姿は無く、窓から垂らされた太めのロープが踊っていた。

下を向いてため息をついたアルの耳に自転車が近づいて来る音が聞こえた。もう一度田を開じて音を聞くことに集中する。

『また速くなつてゐな……あ、ギア変えた、……後10秒…3、2、1。』

田を開けた。

「おはよ。ローディーサーの部品どつかえた?」

「なにしてんの?」

「…質問に答えてよ、まあいいけビね…。じこちゃんのトコ行くから準備運動。…………どしたのさ?」

アルは黙つて自転車にまたがり直すモモに向かつて聞く。

その間にモモは

「私も行く銃取つて来るちよつと壊れてる。」

と凶切らざ早口でまくしたてた。

第19話 いや、初めから見てましたよ。

「ちょい待ちー。」

「なに?」

「後ろは乗れないよ?」

「…なんどよ?」

あからさまに不機嫌な声でモモが聞いた。

「ハル君も来る。後ろは無理。OK?」

「やだ」

口を尖らせてアルを睨む。

アルがなぜかお母さん口調で言った。

「ワガママ言わない、お姉さんでしょー。」

「……だいたご、…本当に壊れてる~モモの『Hボリー & amp; ;アイボリー』つてじこちゃんの傑作じやん。昨日の任務前にも一緒に行つたし…ねえ?」

腕を組み両手を細くして自分より頭一つ分小さいモモの顔を覗き込む。疑いの目。

「や、んなコトあるワケなこじやない?」

詰まったことを誤魔化すように普段とは違つとつてつけたような落ち着いた口調で答えた。

「ふう……しょうがない、ハル君に相談したげるよ」

ため息をつきながらも笑顔でモモの頭をワシワシと撫でた。

「やた！アル大好き！！」

モモがアルに抱きついて嬉しそうに言つた瞬間に2人に背後から声がかかった。

「あのー、終わりました？」

振り返つたアルの目に地面に直に座つたまま首を傾げるハルが映つた。

「うお！？いつからいたの？」

アルとモモは本気で驚いている

「えーとですね『おはよ。ローデレーサーの部品どつか変えた?』のくだりからですね。」

「……それ初めじゃん……うわハズイ！！来てたんなら教えてよ！！」

「あ、すみません。男女が仲良く話をしている時に話しかけるのはどうかなと思いまして。…話しかけて良かつたんですか？」

「いや…まあその…兎に角、今度からは変に気つかわなくていいから…あ一本當に…ハズイ」

2人はうつ向いて本気で恥ずかしがつた。

「氣をつけます。それはそうとモモさん、自転車貸してくれます?」

「え？」

「後部座席乗るんでしょう?」

「あ、いいの!？ありがとう…。」

「はい。」

「じゃあハル君。3、4分ここで待つて、モモの銃取つてくるから。」

「了解です。モモさんの部屋では2人ですけど急いで下さいね?」

ハルはいつもより少し丁寧な口調でそう言つとロードレーサーの隣に座りこんだ。待たされた事を少し怒っているのかも知れない。アルとモモはまた顔を赤くして

「勘弁してくれ。」

と言いバイクに跨つて遠ざかつて行つた。

第20話 ～つまり赤血球が多いんですね～

「じゃあスピードはハルくんに合わせるから先に行つてね。坂道、キツかつたら降りてもいいから。」

戻つて来たアルがモモにヘルメットを渡しながら言つた。バイクの後部座席に乗つているモモの腰のホルスターには右側と後ろ側にマグナムリボルバーが収められていた。

「わかりました。じゃあ…急がなきゃだし速めにいきます。」

ハルがロードレーサーを前傾姿勢で漕ぎはじめ徐々にギアを重くする。少し漕いだ後にスピードを出すためにダンシング。

時速65km

「モモせーん……」のロードレーサー……かなりいいですね……

風とバイクの音こまけないよつて大声で言つ。

「ありがとー、ハルくん速いねー！」

「ちょっとハルくん速すぎない?バテるよー?」

「大丈夫でーす!」

予想外のハイペースに驚きながら少し後ろから着いてくるアルに返

事を返し、またギアを重くする。アウター×トップ。時速80km

「速すぎるよー…うん、絶対速すぎる…もつすぐ坂あるけど大丈夫!?」

「大丈夫でーす。」

坂に入る。

徐々にギアを軽くしてダンシング。

時速50km

7時02分～銃工房到着～

「早く入りましょう。待ってるかもしません。」

「…」解。ハルくん疲れてない?

「大丈夫です。僕、特異体質でヘマトクリット値が普通の人より極端に高いんですよ。」

「…それは結局つまづくこと?」

バイクに跨ったまま2人が同時にきいた。

「結局つまり普通の人より疲れにくいくことです。」

少しあどけた感じで、ハルが答えた。

「えへ、いいなあそれ。俺の特異体質なんか不便なのにな…」

「私なんか特異体质ないよ？」

「モモ目いいじゃん、動体視力。」

「皆何かもつてるものなんですよ。さあ、早く入りましょう。もう約束の時間を5分過ぎています。」

ハルが左手の時計を見ながら言った。

「おっと、そうだね。じゃ危ないから俺から入るわ」

ヘルメットを手に持ったままアルが扉に近づく。

「危ない？」

「下がつて。」

モモがハルの服の襟を引いて退がらせた。

第21話 ゴムでも撃つこた無いでしょ。

力チャ、ギイ

「じいちゃん、来たぞー。」

アルがヘルメットを顔の前に構えて顔だけを扉の隙間から出した。

バンバン

2発分の発砲音が響き、アルの構えたヘルメットに6発の弾丸が当たった。

「！？」

ハルは反射的に腰のホルスターに手をのばしピストルを手にとりスライドロックを外し手動で1発目を装填し、両手で構えた。

「大丈夫、あれ、やーらかいゴム弾だよ。当たるとこによつたら泣くほど痛いけど。」

そう言いながらモモはハルが構えた銃を上から掴んだ。

「遅い！…」

店の奥の畳座敷から迷彩柄のタンクトップに黒いジーンズ姿の老人が叫んだ。

老人の名前は笠倉玄慈。WPMの敷地内でガンスミスの仕事をしている。本部長と共にWPMを立ち上げ、要職を蹴つてガンスミスになつた変わり者だ。

玄慈のしゃがれた声は老人のそれだつたが長身瘦躯の体には無駄な

脂肪が無く、引き締まっていた。

「色々あつたんだよ、てか5分じゃん、許してよ。てゆーかクイックドロウやっていいの?」

ヘルメットを顔の前からだけながらアルが聞いた。
パンツ

「痛ッ!?」

「余計な心配じゃ白髪頭」

につ、と笑いながら老人が言った。その右手にはマグナムリボルバーの銃、左手には全体的にほつそりとした銃が握られていた。

「いつたーーー痛いよマジで!なんでじいちゃんがリボルバー以外の銃持つてんのさー!?」

左手を出しながらアルが老人に近づいた。

「それがなあ……我が愛する妻とちょいとケンカしちまつてな……。でだ、アイツの作図した通りに作つてみたらこれがまたどうだ、いい銃だ!いやーリボルバーだけが銃じやないな。」

「何を今更。俺の銃、全部じいちゃんが作つたくせに。それにばあちゃんの設計ならいい銃とか当たり前じやん。」

「そりゃそつか!因みにお前の銃は嫌々だ。」

アルが出した左手に当然のよつて銃を渡す。

「おーい、終つた?」

開ききつた扉をノックしながら2人が部屋に入つた。

「おお、百恵に陽菜も一緒か。じゃあまず試射場に行くか?」

そう言つと腰に工具が収納された袋を巻き付けた。

「『まずお茶飲もう』って言つても無駄なんでしょう?」

アルとモモが同時に言つた。言つた後にハルを除く3人が笑つたところを見るにお決まりのジョークらしい。1人取り残された感のあるハルが悔しそうに

「次こそは…！」
と呟いた。

第22話 そんなんに必要なんですか？

試射場

『銃工房』の奥の部屋にある試射場には距離を調整できる約が7つある。

隣の部屋から行きと帰りのベルトコンベアが出ていて壁には耳を保護するヘッドホンが、棚にはゴーグルが、それぞれ必要以上においてあった。

「よつしゃ、じゃあまず撃てる銃を右の台に乗せな、撃てんのは左の台だ」

テキパキと準備をする老人が3人を見ずに言った。

「あいよ、手伝ひことは？」

指示される前に台に銃を置いていたアルが尋ねた。

「あー…隣から弾送つて来てくれ。必要なヤツを…そうだな、一丁につき30だ。サバ読んだら撃つぞ。」

「はいはい、合計330ね。じゃ行ってくるわ」

そう言つとポケットに手を突っ込んだまま小走りで隣の部屋に入つて行つた。

後に残されたハルは右の台に乗せられたナイフを不思議そうに見て

いた。

カシャ、ガチャ。

パン、パン、パン

玄慈が台に置かれた銃を撃つ。撃つ度に首を少し傾げ工具を使い、ばらして整備をし、また撃つ。

右の台に乗せられた9丁の銃を撃ち終つた後に

「よし、大丈夫だ。」

とだけ言つて左の台に乗せた銃をばらし始めた。

ガキン！ カチヤ カチヤ カチヤ、ガチャ

中身を確かめ必要な部品を変え油を挿し組み立てる。
バンバン、バン。

「よつしゃー直つたぞ。後は自分で撃つて確かめるや。それからモモ、エボニーとアイボリーは壊れてない。」

「やつぱね」

アルがため息をつく。

「アルさんこのナイフ？撃つてみてもいいですか？」

ハルが的を撃つ手を止めて尋ねた。

「ん？ああ、いいよ。見本みせたげる。あとね、まだ言つてなかつたけどそのナイフの名前はシードだから」

アルが隣に来た後、ハルはモモにだけ見えるようにウインクした。
『ありがとう』

モモが声に出す間に口を動かした。

「やうこやそ、あの訓練機、今日使える？」

アルが
「シード」の使い方を一通りハルに教えた後で聞いた

「ああ悪い、無理だ、一昨日バラしちまつたわ。それよりも陽菜、これ組むの手伝つていいか？」

そして悪いとは思つていない事が伺える声で謝つた後、子供のよくな瞳でハルを見て期待を込めて言つた。

「あ、はい。お願ひします。」

ハルは玄慈の瞳の輝きに少しうろたえながらも了承した。

第23話 完成。ゼクト、パラノス、ランクレッタ

「よつしゃ、じゅあ座敷まで来てくれ、俺も造りかけがあるから工具も出してある。白髪と田恵は適当にイチャついてろ」

そう言つとハルの腕を掴んで引っ張つた。後に残されたアルとモモは「GUM弾を詰めた銃を玄慈の出でいつた扉に向けていた。

2時間後

「飽きたねえ」

「ああ、飽きた。オカゲで微調整バツチリ、まあ今頃は名前でもつけてんじやない?」

座敷

「ツツできたー!ありがとう!」久しぶりに作ったから不安だったんですけど玄慈さんのおかげで思い描いてた通りの銃が出来ました!」

ハルは嬉しそうに笑う。

「お、そりやよかつたな。いやーけど陽菜は才能あるわ。さて、じやあ名前決めるかー名前ー!」

やつきました。とこう顔と声で清々しく言つた。

「え？」

ハルは突然の提案にうろたえる。

「え？ ジヤねえ、名前だ名前。量産型じやねえ自作の銃には名前をつけなきゃ始まんねえじゃんよ」

玄慈はさも当然の事を言ったように腕を組んでため息をつく。

「そうなんですか？ ジヤあ…………

「ゼクト」なんてどうでしょ？ 「

玄慈の態度を見たハルは『ああそつこつモノなのか』といつ顔をして少し考えた後言つた。

「ほー、その心は？」

「神話の中で魔神の側近をつとめる3匹の黒犬の1匹です。」

「魔神の側近か……いいじゃねえか、いいセンスだ。」

「とにかく、この銃の名前はなんていふんですか？」

「あー、まだ考えてねえや。完成してからつける派なんだ。」

ハルは『僕の銃の名前を完成後すぐに聞いたクセに』と思つたが口には出れず。

「そうなんですか。」

とだけ言つた。

「そうだ、黒犬、残りの2匹の名前はなんてんだ？」

「確か…

「ゴラエス」と

「ランブレッタ」です

「よつしゃ！決定だ。そつちのちょっとデカイのがゴラエスだ、ん
で普通サイズがランブレッタ。」

「そんな簡単に決めちゃっていいんですか！？」

「気に入りやいいんだ。」

「…そんなもんなんですか。」

「ああそんなもんだ。さあ、銃も出来たことだし白髪達呼んで茶あ
でも飲むか！！」

「了解です。じゃあ2人とも呼んできます。」

「おー、頼んだ。」

玄慈は立ち上がりて台所へ向かいながら手をヒラヒラと振つて軽い
口調で言った。

第24話　畠の下からモノノミチワ

「アルさん、モモさん、入つていいですか？」

公園であつたこと繰り返さない為に分厚い扉をノックしながらかなりの大声で尋ねる。

「…………」

しかし、繰り返し呼んでも返事が戻つて来ることはなかつた。少し考えた後、

「入りますよ」と言つてゆっくりと扉を開いた。

「ぐう」

「すう」

部屋に入つてすぐに、壁に設置されたスピーカーから何故か寝息が聞こえてきた。

「……マイクは……奥の部屋かな？」

独り言を呴きながら奥の部屋に進んで行つた。

「あれ？」

マイクを接続する機械はあつた。その機械の上には木箱が置かれていて、スイッチが押されていた。延びたコードは床に落ちてスタンドマイクは5畳の畠座敷の下に入り込んでいた。

「？」

畳座敷の下に空間があることを初めて知ったハルは身を屈めてその空間を覗き込んだ。その瞬間、左の足首と床につけていた右の手首をいきなり、かなりの力で掴まれた。

「うおわっー!?」

情けない声をあげながら尻餅をつき後退る。それでも足首と手首を掴む手は力を緩めずに動く事ができなかつた。

「ん……ふあー……ん?なんだコレ?」

「ツー?イツツタイ!!痛い痛い!!ちよつ、タンマ折れる!!」

寝惚けたアルは寝起きとは思えない力でハルの足を田の位置まで持ち上げようと捻りあげた。

「…ああ、ハルくんか。何してんの?」

薄田を開けて尋ねる、手に力を込めたまま。

「早く離して下さー…」

ハルは切迫した泣きそうな声で弱々しく言った。

「なにを?……ああ、あ~、はいはいはいはい、「ゴメン。モモ、起きな、そして手を離そう。ハルくんが泣きそうだ」

まだ眠いのか薄い反応を示した後で隣で眠っていたモモの頬を薄い

掛布団の上で繋いだ手を離してペチペチとたたいた。

「……ん？……あ、おはよう。ん？なにコレ？」

寝惚けたモモはハルの手を田の位置まで持ち上げようと捻った。

「ツー？イツツタイ！…痛い痛い！…ちょっと、折れる！…？」デジャ
ヴ！」

「ああ、ハルくん？何してんの？」

「…ツ手を…離して下さりお願いします」

「あ、あ～、「メン」「メン。許して」

パツと手を離して薄い反応で謝る。その後2人は畳座敷の下のスペースから這い出してきた。眠そうに頭を搔きながら畳に座った。

第25話 魔神の側近と魔人の銃

「銃はできた?」

うつ向いて頭を搔いていたアルがパツとハルの方を向いて聞く。

「はい、今さつき完成しました。試し撃ちはまだですけどいいデキですよ。」

嬉しそうに笑いながら言った。

「へー、そりや良かつた、名前は?」

「ゼクトです。玄慈さんが作つたのは『グラエス』と『ランブレッタ』。

「わ、一緒だ!…なんか嬉しいなあ」

それまで座つたままボーッとして寝ているのか起きているのかわからなかつたモモがいきなり大きな声を出した。

「つおー? ビクッた!…なにが一緒になの?」

「おんなんじ神話から名前取つてるの。ね、ハルくん。黒犬でしょ?」

瞳を輝かせながら自分の中ではわかりきつた答えを確認する。

「あの神話知つてたんですか!……………そういえばエボニーとアイボリーは魔人が持つてた銃ですね、リボルバーだから気付かなかつた!!」

その質問にまさか知っているとは思わなかつた、と言つ風に驚いた後でエボニーとアイボリーを思い出し、なんで気付かなかつたんだろ？と言つ風に声をあげた。

「そりなんだよね～、エボニー & アイボリーはリボルバーじゃないんだけど…おじいちゃんの趣味でリボルバーになっちゃつたんだ…リボルバー以外の銃の良さに気付いたのを機に新しいの作つてくんないかな…」

「んでさハルくん。もう帰るの？」

アルが自分が入れない話題に見切りをつけて話題を変えた。

「あ、いえ。玄慈さんがお茶を煎ってくれるんです。だから2人を呼んでも来てくれって」

「マジで！？？」

「ホント！？」

2人が同時に半ば叫ぶように聞いた。

第26話 味は茶道有段者の如く

いきなりの大声に驚き、色々な考えがハルの頭をよぎる。

「えつ！？あ、はいホントです。どうかしたんですか？……まさか玄慈さんの煎れたお茶もモモさんの作ったケーキみたいに……」

途中まで言つた後に殺氣に気付いたハルは急いで口をつぐんだ。

「違う違う。珍しいから驚いたん。機嫌がいい時しか煎れないんだ。味は保証するよ！かなり美味しい！！ヤバいくらい。プロの煎れたコーヒーぐらい美味しいんだよ！！？」

タイミング的にはフオローダがフオローレと言つよりは素直に喜んでいる様子のアルは早く行こう。と言つ風に立ち上がりソワソワしている。

「コーヒーに例えるのはわかりづらいでしょ、もっとこう……茶道の段を持つてるぐらい的な表現の方がしつくつくるんじゃない？」

殺氣を感じなくなつたモモがやはりしゃいだ感じで言つ。2人の反応を見るとハルも自然と期待が募る。

「うわあ～、すつじい楽しみです！それじゃあ早く行きましょうか……！」

「やつだね、急いでー！あーおばあちゃんお茶菓子作ってくれないよ！」

「やつだね、急いでー！あーおばあちゃんお茶菓子作ってくれないよ！」

かなあ！？」

幼い子供のような期待を込めた声色でモモが言つ。

「いーねえー！疲れてるから甘いモノ食べたいなあ……」

「たしかアリーさんは今この家にいるはずですよ。靴が前に来た時と同じだけあつたから。」

「ハルくん記憶力いいんだねえ……あと洞察力。羨ましいな」

「ホント、記憶力いいって羨ましいなあ……私悪いのよねえ……」

感嘆の声をあげる2人を見ながら恥ずかしそうに頬を搔く。

「ありがと、つて早く行かなくちゃ……」

「「そうだった！！」」

3人は大した距離の無い通路を駆け足で玄慈の元へ向かつた。

第27話 抹茶アイス

「おっ、やつと来たか。早く」ち来て座れ。」

藍色の作務衣に着替えた玄慈がついたきまで油や掃除棒や工具が散らばっていた畳を綺麗に掃除をして畳の上に茶道具を広げ、あぐらをかいて手招きをしていた。

どうやら機嫌を悪くせずにするんだらしい。3人はホッとしながら畳の上に座った。

「よし、そんじゃあ今から抹茶煎れるワケだが……今日は自家製抹茶が少ねえんだわ、ああそんな顔すんな。まあ落ち着け、抹茶は少ねえがコレがある。」

抹茶がない、と告げられ少し不満気な顔をした2人を見た後で玄慈は振り返り小さな冷蔵庫から木の箱を取り出した。

冷やされた木箱からは冷たさを主張するような白い煙が薄く出ている。

冷蔵庫から出てきた箱をハルは『なんだか』と嘆の風に、アルとモモは期待を込めて見つめた。

「ほれ、抹茶の変わりだ。」

蓋を開けられた箱からは、今まで溜め込まれていた冷気が一斉に逃げ出した。

「こよつしゃ……」

「わ、やつた……」

「わあ、美味しそうですねえ……」

蓋を取られた箱の中にはアイス（ジュラート）が詰まっていた。シットリとした質感のそれは抹茶色をしてある種の貫禄のようなモノを漂わせながら箱に収まっていた。

「最近は特に暑かったからな、愛する妻が作ってくれたんだ」

自慢するように胸を張り、のろける。

「まあとりあえずコレ食つてろ。」

涼しげな硝子の皿を冷蔵庫から、銀のスプーンを棚の引き出しから3つずつ出して3人の前に置いた。

ガンスミスの老人の家にセンスのいい食器、妙な感じがするがおそらくは彼の愛する妻の趣味なのだろう。

「ウマー！」

「んおいしー！」

「わあ…美味しいですねえ…」

冷えた皿にのつたアイスをスプーンで掬つて口に含み味わった後で各々感嘆の声をあげる。

「茶あ入つたぞ、自家製と市販の混ぜたヤツだけどな、」

アイスを食べ終えた3人の前に出された湯気の立つ湯飲みは上品な色の抹茶でみたされていた。

3人が湯飲みに手を出そうとした瞬間

「お～いー。お団子食べる？食べるよねえ？イッパイあるよお」

ドアが突然、勢いよく開いて女性の声が部屋に響いた。

第28話 小さな歓迎会

「ばあちゃん！もしかしてそれ作りたて！？」

「モーだよー、今さつき出来たと！」モー！」

楽しそうに親指立て自慢をするように言つた。

アルに

「ばあちゃん」と呼ばれた外国人女性は俗に言つ『かわいいおばあちゃん』だった。名前はアリー、外国人にしては小柄で華奢な体に整った顔立ち、明るい灰色の瞳、口調も若々しく後ろで一束にまとめた薄いブラウンの髪の毛を揺らして朗らかに笑つている。

「ホントに今日はどーしたの！？アイスに抹茶にお団子つてスッゴい豪華！…いつも今日はめんどくさいから嫌、とか言つて作つてくれないくせに！」

モモは一応、といつた感じで文句を言つが

「ハルの歓迎会みたいなものよ、さあ早く食べて食べて、お団子は早く食べた方が美味しいのよー。」

案の定アリーは文句だけは聞こえなかつた、といつた風に話を進めた。

モモはため息をつきながらも訓練の後のお茶会を楽しむために気持を切り替えた。

「んじやあ、世界の平和と安定を守る仲間がまた1人増えたことを

祝つて、「

玄慈はそつ言つと手に湯飲みを持つて前に差し出した。

「仲間の安全と平和な日常を祈つて、」

アリーは玄慈に続くよひ言葉を続けると同じよひ手を前に出す。

「乾杯！……！」

5人は声を揃えて大声で言い。歓迎会を始めた。

「ウツマイー！」
「おいしいーーー！」
「これホントにどうやって作ってるんですかーー？」
「おー、やっぱ最高だなーー！」
「お抹茶おいしーー！」

その後、団子の作り方、お喋り、銃の話、ノロケ、その他色々な事を話し、お開きになつたのは夜になつてからだつた。

第29話 趣味はナニ?

夜の部屋

ハルの部屋は壁に掛けた銃やナイフ、ベッドと机、小さなタンス以外は何も置いていない、キッチンがリビングと区切られているため寒々しさすら感じる生活感の無い部屋で3人は会話をしながらトランプを楽しんでいた。

知っているゲームをほぼやりつくし、ハルがトランプを片付けている時にモモが前振りなく、いきなり言った。

「ねえハルくん。ハルくんの趣味ってなに?」

いきなりの質問にハルは少し困ったような笑顔を浮かべた。

「あ～俺も知りたいな。ハルくんの部屋生活感無さすぎだよ、趣味とか全然わからんもん」

ハルの顔が見えない位置に居たアルは
「困ったような笑顔」を無視した。

「趣味とかそういうのは…無いんです。本部長に拾われてからはこの人の役に立ちたいってずっと訓練してましたから…本部長は色々させてくれましたけど、趣味とまでは…すみません、暗くなっちゃって、僕、コーヒー持つてきます。」

後悔はしていない、お陰で昨日は役に立てた。ただ、生死を共にする友人に語れるだけの趣味が無いことが寂しい。ハルは苦笑いのま

まキッチンに向かった。

「ハルくん、ちょっと待つてねーすぐに戻るからーーー」

「私もーちょっと取つて来るーーー」

「えつ？ちょっと、取つてくれるって……」

そこまで言つた時にはもうドアは閉まっていた。

「…取つてくれるって…何をですか…？」

質問する相手はもう部屋を出でていってしまったが、なんとなく決まりが悪くハルは質問を一応最後まで言った。

第30話 趣味決定？とタカの訪問

2人が部屋を飛び出して数分後。

「お待たせい！！」

ドアを勢いよく開けてアルが飛び込んできた、背中にエレキギターを2本背負つて左右の手にはアンプが持たれていた。

「アルさん、どうしたんですかいきなり部屋を飛び出して……なんですかそれ？」

「『ゴメン』『ゴメン』、ギターだよ、見たこと無い？ エレキギター。そ、もうすぐモモも来るから来たら早速弾いてみよつ……あ、ハルくんは右利きだよね？」

そう言つとアルは状況が飲み込めず無言のハルにギターを持たせた。

「お待たせー！……」

アルがギターをハルの肩に吊り下げた瞬間にモモが閉まりきつていなかつた扉を蹴飛ばして入ってきた。

「お、似合つ似合つ。さあ、やつてみますかー！」

モモは肩に掛けていたベースを前に移動させ、手に提げていたアンプ床に置きながら言つ。

「ちよつとーちよつと待つて下さるよー僕、ギターなんてしたことありますよー？」

「問題無い、音楽は心を癒すつておつちゃんも言つてたよ？」

かくしてハルの趣味作りが始まったのだつた。

カンカンカン

練習を始めて数十分、思いの外ギターのセンスのあつたハルの趣味が半ば強引に決定されかけていた時、窓の外から鉄板を叩くような金属音がした。

「うわ、うーちゃんじゃない？」

「ああ…うーちゃんだよ、絶対。」

アルとモモはあからさまに嫌そつた顔で言葉を交わす。

「？」

また一人取り残されたハルは窓に近づきかかっていたカーテンを左右に開いた。

「クエ？」

「うわ！？」

窓の外では止まり木に止まつた大型のタカがハルの顔を見て首を傾げていた。その足には紙が結びつけられていた。

第31話 タカが任務を知らせに来たよ

「ハルくん、窓開けたげ。任務かもしない……あ、ちなみにその子、昨日の爆発から救つてくれた命の恩人の兄弟だよ。ウキタケつて名前」

アルはため息をつきながら椅子に座り、窓に一番近い位置に居たハルに窓を開けるように頼む。

「…………あ、はい！わかりました！…………えつ！？命の恩人の兄弟！？えつ…………鳥！？」

半ば放心状態だったハルは混乱した後に慌てて窓の鍵を外して窓を開けた。窓枠の外側には紐が吊りさげられていて、その紐を辿ると小さな鐘が取り付けられていた。

「クウエ～」

『うーちゃん』と呼ばれたタカは大型の鳥とは思えない可愛い鳴き声で感謝の意を示す様に鳴いた。のだが、ハルは開いた窓の隙間から入つて來た大型の鳥に少し身を引いた。

「おいで、うーちゃん。」

モモが鷹に声をかけると鷹は大きな翼を広げて机まで飛び、ハルの椅子の背にとまつた。

その足からアルが結ばれていた紙をほどいて開けた。

「なんて書いてあるんですか？」

混乱から幾分立ち直ったハルが聞く。

「明日の朝5時に梓、陽菜、百恵、和秋の4人は本部長室に集合。詳しい説明は移動中に。だつてさ、皆昨日の任務の事後処理で出払つてるのかな……あ、練習はお預けか…」

「私も出動か…結構久し振りだなあ、どんな任務だろ?」

「和秋がいるし待ち伏せとか争闘作戦とか長時間系じゃない?」

「4人で争闘作戦はツラいな…」

「梓さんって誰ですか?本部長に貰つたプロフィールに梓さんて人いましたつけ?和秋さんは後方支援の人ですよね?」

窓を閉めたハルはゆっくりと椅子に向かって近づいて行く。その時のモモは呆れた顔をアルに向けていた。

第32話 生活感は自然に出来るのだ。

「アル、まだ本名教えてなかつたの？」

モモはアルを見ながらため息混じりで言つた。

「えつー？アルさん…本名梓って言つんですか！？？」

『アル』があだ名と言つことは直接本人から聞いていたものの本名はまだ聞いていなかつた。と言つよりは、もつ本名を聞くこと自体を忘れていた。

「うわっ！…ミスつた！…口滑つた！あー、もう…やつちやつたよ…恥ずかし…！」

アルは自分の名前を氣に入つていなか恥ずかしがり頭を抱えた。

「いいじゃん、別に。ハルくんはもう立派な仲間でしょ？」

モモは少し怒つたようにアルを睨んだ。

「やつややうだけど…梓だよ、アズサ。男なのにあずだ。」

バツが悪やうに向いてブツブツと誰にでもなく文句を言つて。

「いいじゃないですか、良い名前だと思いますよ？」

「ビーも、けどねえなんか嬉しいんだよなあ……」

「いいじゃん、梓。じゃ、明日早いから私はもう寝るね。ハルくん、ベースとアンプ置いといでいい?」

ワザとアルの事を『梓』と呼んでモモが言つ。

「あ、はい。いいですよ」

了承。

「あ、じゃあ俺も。明日からの任務が終わったらまたハルくんの部屋で練習じみつけ。」

「……了解です。けどあまり僕に期待しないで下さいね?」

「なに言ひやつてんの、かなりいいセンスじゃん、すぐ上達するよ。じゃ、みんなおやすみ。また明日」

「じゃ、俺も行くわ。ハルくん、ウキタケ、おやすみ。」

「はー、おやすみなさい。また明日、頑張りましょ!」

2人が出ていった部屋には2本のエレキギターとベース、3つのアンプがスタジオのように配置されている。ハルは愛しそうにその楽器を眺めてからベッドに向かった。枕元ではウキタケがすでに眠っていて、少し驚いたがハルは穏やかな気持ちで怖がることなくベッ

ドに横になつた。

余談だが、アルのプロフィールは名前の部分がマジックで塗り潰され隣に手書きで『アル』と書かれていたらしい。

第33話 夜が明け、任務説明、移動へ

翌日

朝5時00分

まだ昇りきっていない太陽が弱々しい柔らかな光を世界に放つている。

「平和な世界」を絵に描いたような風景。だが今日も、争いは続いている。

本部長室では任務の説明を受ける4人の姿があつた。

「……以上。説明を終える。今回は急な任務になつて申し訳ない。しかし今回の任務は世界の平和を保つ上で重要な任務だ。頑張つて励んでほしい。聞きたい事があれば移動中にアオさんに聞いて下さい。みんな、必ず戻つて来るよう。健闘を祈っています。」

本部長が本部長らしい厳しい口調で説明を終え、家族のよつと優しい口調で付け加えた。

（WPM空港）

基地から程近い平地には空港がある。それぞれ何機かあるへり、飛行機は倉庫に収まっている。4人は空港の門までバスに乗つて移動

した後、和秋を除く3人は雑談をしながら装備を背負つて倉庫まで歩く。

「ところでさ、何番だつたつけ？」

一緒に歩いている3人にアルが主語の無い質問をする。

「一番。」

4人の内で一番小さく、今まで会話に参加していなかつた1人だけやたらと大きな荷物を台車に乗せて押している和秋が簡潔に答える。和秋は細いがシックカリとした体つきをしていて、顔は中性的。しかし体調が悪いのかと思う程に色が白い、むしろ青白いと言つにふさわしい色だ。白皮症のアルよりも白い。さらに肩にかかる程の長さの真っ黒い髪が目にかかるつているせいで不健康な印象を受ける少年だ。

「一番かあ」

アルが一番遠くの倉庫を見ながら呟く。

「お父さんの話聞いてなかつたの……？」

眉を寄せて不機嫌な顔でアルを睨むようにして見る。ちなみに和秋の父は本部長ではない。

「聞いてたよ、だいたいね。けどさ、昨日は銃工房にいつたりハル君にギター教えたりで疲れてたんだ。そこに任務が舞い込んだもんだから疲れが残つてね。」

「 もう。 じゃあこい。 」

短く言つとまた顔を正面に向けて黙々と歩いた。

第34話 待ちくたびれたよ

（1番倉庫）

8つある倉庫の中で1つだけシャッターが開いた倉庫、その中には輸送機とも戦闘機ともつかない中途半端な大きさのあるプロペラタイプの、空色の飛行機が収納されていて、その横では工具箱を椅子変わりにして座っている女性がいた。

「お待ちしておりました。来る途中に敵と遭遇したのかと思いましてよ。手伝ってくれた整備士の皆様は別の機体のトコに行っちゃつたしさあ、荷物も積み終わつたし、暇だつたんだよ？」

倉庫の前に立つた4人を見て立ち上がり爽やかな笑顔で揶揄をしながら爽やかに嫌味を言う女性。

名前は橘葵。WPMでパイロットをしている。スタイルが良く知識が豊富でWPMの中では歳下だけではなく一部の歳上からも姉のように慕われている。

「話相手つて言つたら『染赤』ぐらいだし、本ッ！当ー！……寂しかつたなあ……無機物に話しかける女の気持ち、わかる？」

そう言いながら飛行機の胴体部分を軽くパンパンと叩く。

「ごめんアオちゃん、でもこれでも急いで來たんだよ？なんせ急な任務だつたからさあ……」

近づきながらアルが弁解をする。

「あら、急な任務に間に合つよつに染赤を整備するのは楽じゃなか

つたような気がするんだけどなあ……セレベ「ビツリ?」

最初は少し不機嫌だつたが会話をしている内に4人を困らせる事が楽しくなつてきたらしく、正論を言いながら相手がどうでるかニヤニヤしながら待つている。

「すみません葵さん。コレを僕が受け取りに行くために玄慈さんの所によつて貰つたんです。」

ハルは腰に巻いていたポーチの中で唯一横向きで一番細長いものから50㌢ほどの日本刀のような刀を取り出しながら葵に近付き、言つた。

「…………ねえ、もしかして君がハル君?」

今までアルの目を見て喋つていた葵がハルに顔を向けて聞く。

「はい、はじめまして。葵さん。」

「…………」

葵は無言で手招きをした。

「……?」

ハルは3人を振り返つて見た後で不思議そうに葵に近づいた。

第35話 仲のいい兄弟

ハルは自分を手招きで呼んだ女性の約1m手前まで歩いた。

「なんですか？」ツ！？？？

「かつわいー！！！ね、ハル君！今回の任務終わったらお姉さんの部屋来ない！？てゆうか来なさい！？」

葵は少し間合いを詰めてハルの両肩を手で力強く掴み瞳をキラキラさせながら自分の身になにが起ったのか理解出来ないでいるハルに早口でまくしたてた。

「待てこの色魔」

明らかな侮蔑を込め今まで静かに成り行きを見ていた和秋が口を開いた。口調も普段と違い幾らか厳しい。

「あ、和秋だ。居たの？でも、姉にむかってなによ、色魔つて」

今まで気が付かなかつたという風にわざとらしくキョトンとした表情をつくる。

「そのままの意味。とりあえずその手を離しなさい。」

それを全く気にせず肩を掴む手を指差す。

「いいじゃん別に、なに？ヤキモチ？」一緒にお風呂入つてあげて無いから？」

気分を害した、と言つよつな顔で和秋を睨みつけ挑発する。

「違う！…そもそも物心ついてからは無理矢理……いいから早く任務地まで連れてつてよ。急ぎの任務つて知ってるでしょ？」

挑発に一瞬乗つてしまつたもののその後冷静に仕事の話を持ち出す。

「はいはい、わかりましたよ」だ、じゃあ乗つて、早く早く。あ、食べ物はいつもものトコね。あ、そうだー！ハル君荷物運び手伝つて！…」

「待て、姉ちゃんさつき自分で荷物も積み終わつたつて言つてただろ。」

ステップに足を掛けて和秋が言つ。

「……チツ！」

その言葉にあからさまな舌打ちをしてから

「ハル君、もう乗つていよい。」

そう言つと自分もステップに向かつて歩いた。

「……仲がいいんですね。」

後ろからハルが声をかける。その声に葵は

「まあね」

と振り返つて嬉しそうに笑いながら答えた。そして『染赤』に乗る前に

「任務終わつたら私の部屋に来る」と、検討しといで。」と小声でつげ、ハルは苦笑いで返した。

第36話 私が神だ！

滑走路に進み出たプロペラタイプの飛行機、染赤は低いエンジン音を響かせ、少し高くなつた太陽の光を浴びて青く輝いている。

「あ～。」からアオ聞こえますか？」「うわ～

緊張感のまるでない声で飛行士が無線機のスイッチを押しながら喋る。

「からアル、聞こえますよ～。どうぞ」

「からハル、僕も大丈夫です。どうぞ」

「からモモ、私もオッケー。どうぞ」

「からカズ、大丈夫。どうぞ」

「オーケー、無線機は全部良好ね。新型は初期不良が怖いけど今回は優秀ね！さすが開発部！」

葵が頷きながら嬉しそうに言つた。

「前の任務で使つた旧式は不便だつたけどね～」

アルが首についている無線機のスイッチから指を離してボソッと小言を言つ。アルの小言はエンジンから発せられる爆音とプロペラが回転することでおこる風切り音で誰にも聞こえなかつた。

「よつしーじゃあ出発だ！！10秒後には離陸するから喋らないよう二二一舌噉むからね…。『葵、行つきます…』」

「……離陸前にふやけるなよ。…？」

葵は2つあるエンジンレバーを手前に一息に引き、今まで踏んでいたブレーキを一気に離した。回転数を上げたプロペラが空気を後ろに押し出し急激な加速をした後、重たい機体がゆっくりと地上を離れた。

「はい離陸へ。えへ、当機は只今から南に進路をとり、目的地に着くまでに一度南部基地に給油の為に着陸、一泊します。翌日トラブルが無ければ午前8時に出発、南部基地にはだいたい午後3時には到着予定です。質問ある人へ、無いよね？よし、じゃあ適当にくつろいでてね。後、離陸時に注意を無視して喋つて舌噛んだバカな弟に一言、飛行機に乗ってる時は私が神だ！！」

民間機のような気の抜けるアナウンスを無線を使い流し質問の有無を聞き質問タイムを強制的に切った後、舌を噛んだ和秋に無茶苦茶なコトを言つて話を終了した。

染赤は順調に高度を増し、基地から遠ざかり戦場に向かつて行く。

第37話 空の上の作戦会議

（上空）

春の終わり特有の、夏の湿気を少し含んだ空気を押し退けるようにして輸送機と戦闘機の中間程の大きさの飛行機が比較的ゆっくりとした速度で飛んでいる。中では若い人間達が地図を囲んで話込んでいる。

「比較的安全で待機可能なポイントは6つ確認してから標的の動きを見て出来るだけ接近戦で静かに」

「アルさん、接近戦苦手なんじゃなかつたんですか？3人ぐらいなら僕だけでも…それに」

「ツーマンセルは基本、それにアルは意外と動ける、けど標的の動きにあわせるより誘導して」

「ダメだよ、もし誘導中に仲間に連絡されたら状況が悪くなる」

「私チヤフグレネード持つてるよ？」

「爆発音はどのくらいですか？」

「水中で弱めの手榴弾が爆発したぐらいかな？」

「作戦会議中失礼、こちら仲間外れの機長、当機は後5分程でWP M南部基地に着陸予定です。WP Mと敵対して居る国の領空とか色々考えて飛ばしたから遠回りだったしお姉さんとっても疲れました。

までの着陸際は雑になつて多少揺れるかもしぬませんが気にするな、」

今まで黙つて染赤を操縦していたアオが少し険を含んだ物言いで話に入つて来た。

「了解、けじ安全運転で頼むよ。アオちゃん」

本部の空港を出発して8時間、その間一人で飛行機を操縦するのはやはり疲れるのだろう、喉元についている無線機を使って

「乗客」に話しかける

「機長」の声色は本当に疲れていた。

「分かつて、シートベルトしつかりしめて衝撃にそなえて、元々得意じゃないから酷いかもしない」

「了解、任務の前に死んだら洒落にもならないしね」

「任務で死んでも洒落になりませんって……」

アルの軽口にハルが適切につつこむ。

「いつまでもバカなコト言つてると僕みたいになるよ、」

和秋が舌を出す。少し血がにじんでいた。

「それはイヤだなあ、よし、作戦は南部基地についてから煮詰めよう。今はアオちゃんの集中力をそがないようになつね。」

「許可も出たから今から降りるよ、もう一度シートベルトの確認し

て、あと荷物は抱えてて。」

葵がそう告げた数秒後に『染赤』はゆっくりと高度を下げ、平原の中に一つだけある大きな建物へと向かい、滑らかに降りて行った。

第38話 着陸成功。ジープに乗ったオヤジ

「4・3・2・1……はい後輪ついた……あ、くそぅ、……着陸、ふー、シートベルト外していいよ」

途中

「あ、くそぅ、」と咳いたものの無事着陸を終えた葵が息をついて目をつぶる。

「アオちゃんお疲れ、さあ皆、降りようか。」

アルが荷物を背負いドアに向かつ。

「アオ姉おつかれ！！
「お疲れ様でした」
「……オツカレ」

「はいオツカレサマ、後で合流するから先行つてて

各々が葵に効い言葉をかけ、葵は言葉を返し染赤を降りる4人を見送った。中央のラインから大分ずれて止まつた染赤は2台のトラックに牽引され格納庫に向かう。3人が南部基地に向かい歩いていると1人の男がジープに乗つて近付き大きく快活な声で半ば叫ぶように話しかけた。

「いよッス！！久し振りだな梓！！それにモモ、和秋……とお前は新入りか？」

「本名を呼ぶんじゃねえ、クソ親父！」

アルは男を睨みつけ噛みつくように言った。

「なんだよ梓、まだ馴れてないのか？それにお前…アルとか呼ばれてるらしいがそのあだ名は逃がした敵につけられたもんだろうがよ、姿見られてその上逃がしたなんて狙撃者として2流もいいとこだ。お前は白髪たら目の色たら肌の色たら特徴多いんだから氣いつけろ。基地出て街歩けなくなんぞ、そんで『アルビーナ』オッド『なんてどこがいいんだよ。『梓』のほうがよっぽどいいだろうが、なあ新入り！…」

「そうですね…梓は桜に似て綺麗な木ですし梓弓は魔避けに鳴らす弓でその上柔軟で強靭、考えられたいい名前だと思います。アナタが考えたなんですか？」

「おおう……いや、俺と嫁で考えたんだ…博学だな新入り！…気に入つた！…」

早口でまくしたてハルに話をふつて返ってきた答えに驚き、その後大笑いした後で親指をたててやはり叫ぶように言った。

第39話 南部基地へ客室へ

5人を乗せたジープは自身のエンジン音に負けない大声での会話を車外に撒き散らしながら基地の外れにある空港から中央近くにある大きな建物に入った、そこは本部基地の作りとはまったく違う建物だった。そつけない感じのある外見とは裏腹に、昼どきの基地内はガヤガヤと賑やかで民間空港のターミナルのような雰囲気のある内部は明るい空氣で満たされている。

「ついたぞ新入り！ここが南部基地の居住区だ！！向こうの食堂で飯も食えるしそこの売店で買い物もできる。本部より広いだろ！端に客用の部屋があつから使えよ！！後で行くから鍵は開けといてくれ！んじゃな！！」

アルの父親、勇護は部屋の鍵を開けておくように言い、答えを聞かず居住区の端を指差し自分はエレベーターに向かい大股で歩いて行つた。途中何人かと言葉をかわし大笑いをしていた。

「勇護さん、相変わらず人の話聞かない人だねえ…」

モモはアルの肩に手を置いて慰めるように言つた。

「ほんとになあ、相変わらずつるさいし…1日だけでもどうにかならんもんかねえ、まあ無理だろうけど…ハハハ」

アルは諦めたように溜め息をつきながら乾いた笑い声をあげた。

「でも明るくていい人じやないです、それに聞いていないようで大事なコトはちゃんと聞いてます、知識も深くて好感が持てますよ。

僕はアルさんが羨ましい。

ハルが本心から言ひ。

「勇おじさんは優しい… それより部屋行こう。疲れた。」

和秋はそう言ひと台車を押して居住区の端にある客室向かつて歩く。ハルは頷いて、アルは首を傾げ、モモは微笑み、和秋の後についてゆつぐりと歩いた。

第40話 決意

（客室）

4人が客室に入つて3時間、いかにもゲストルームといった感じの落ち着いた内装の部屋の中では作戦会議が開かれていた。

「よし、じゃあ動きは後で各自で確認ね。で、ハル君、今更だけど接近戦でサイレンサーつけた拳銃使つて手もあるけど……ホントにナイフでいいの？」

アルはナイフを使う事で手に強く残る『殺した』という感覚に実戦経験の少ないハルが耐える事ができるか心配して言った。それは、和秋もモモも口には出さなかつたが内心、不安に思つていた事だつた。

その問いにハルはアルの眼をしっかりと見て言ひ。

「はい、責任から逃げちゃいけませんから。それにこの血で染まつた髪を切つてないのも、僕の決意です。自己満足かも知れないけど、…背負つて生きよつて」

アルの眼帯で隠れていらない蒼い瞳に映るハルの顔には強い決意が伺えた。その決意に3人が押し黙り壁掛けの時計が秒針を動かして自己主張する音がハツキリと聞こえる静寂が続く。

その時、扉が勢いよく開き

「オツス！ウツス！お疲れさん！！食いモン買つて来たから食え！
！」

場の空氣に全くそぐわない大声でアルの父親こと勇護が飛び込んで来た。4人は驚いて扉の方に視線を向けた。

「……空氣読めよクソ親父…」

心底嫌そうな顔をしてアルが呟くように言つ。

「お、怒つてるなクソ息子よ！…そんな時は甘いモン食え！…ほら、ケーキ、紅茶もあるぞ、和むぞ！…皆適当に取つて食え！…」

勇護は息子の嫌そうな顔を無視して手に持つていた大きな袋から紙の箱とペットボトルの紅茶を取り出した。

「わあ、ありがとうございます勇護さん。僕、カップとお皿とフォーク持つて来ます。」

ハルは重くなつた空氣が散つた事を感謝して立ち上がつた。

「あ…、私も行くよ、5人分が多いし場所ハツキリわかんないでしょ？」

「あ、すみません。お願ひします。」

モモの声に振り返つたハルの表情はムリをした硬い笑顔だった。

第41話 トライウマ

WP本部には本部、支部を併せた全隊員の病歴、性格、実績などのデータが管理されている。勇護はプリントアウトされたデータを見ながら言つた。

「で、結局ナイフにしたのか……大丈夫なんか？新入りのデータ見る限り向いてねえぞ？見てみろコレ」

「ああ、決意なんだ！つてさ。ムリしてなきゃいいけど……ん？何

「寂しそうな眼だつたよ、ハル。」
「ん? 何ソレ?」

ハルとモモがキッチンに向かつた後、リビングに残された3人はソファーに座り新入りのハルについて話し合つていた。アルと和秋は勇護の持つている紙を受け取つた。

「……………親父…コレ…個人データ！？」

「え……個人データ……!?まさか……流用……?」

「流用！？厳罰モンじゃん！— 気になるからつてそりやダメだろ！？本部に引っ張つてかれるぞ！？おっちゃんは親父を本部に置いときたいいんだろ！—？」

「厳罰！？？？厳罰……………」
違うんだ オッサン、違つ違 ああ……………」

「！？ 勇おじさん！？ 大丈夫！？」

「親父！？ オイ！ どうした！？」

『厳罰』と言つ言葉を聞いた勇護はいきなり体を丸めて震え出した。2人は勇護の態度の変化に戸惑い、立ち上がりつて勇護の隣に駆け寄つた。

「オイ！ オイつて！ クソ！ ……田え覚ませクソ親父！ ……ッセイ！ …！」

アルは掛け声と共に勇護の頬を平手で張り倒した。

「…………ハツ！ ！？ 流用流用言づんじやねえ！ ！ 厳罰つてあとセリフが何はあつても俺が前で言つたな！ ！ 賴むから！ ！ ホント頼むから！ ！ コレはちゃんとオッサンに頼んだ送つて貰つたんだよ！ ！ 言い忘れてたけどな、今回は特別に任務サポーターが南からついた、それが俺だや！ ！ ！ よろしくネ！ ！ ！ ！」

アルの張り手でソファーに倒れ込んだ勇護は正気を取り戻してにをはが怪しいセリフを声高に叫んだ。語尾も若干おかしい。

「…………昔何があつたんだよ…………」

「聞かない方がよさそうだね…………」

アルと和秋はひきつった笑みを浮かべて顔を見合せた。

第42話 ギッシリ詰まつた食器棚

アルと和秋が錯乱した勇護に戸惑つてゐる頃、キッチンでは平和な時間が流れていった。

「ねーハル君、このお皿オシャレじゃない?」

「そうですね、シンプルだけど上品な感じがします。」

食器棚の中に必要以上に大量に収まつている皿の中からモモは使う皿を、瞳を輝かせながら選んでいた。ハルは話かけられる度に微笑みながら自分の意見を言つていた。

「…………ねえハル君? 今さらだけびわづきからずつと敬語だねえ?」

「あ、すみま……」めん、モモさん。まだ馴れなくて「

「よし、けどさあ……さん付けも嫌なんだよねえ……それもどうにかなんない?」

「いや……流石に呼び捨てにするわけにもいかないし……」

ハルは少し困つた顔で言葉を濁す。

「じゃあさ、さん付け以外で好きなのでいいよ。…あ、ちよい待ち……ねえ……変な声しない?」

モモはリビングでの騒ぎ声に気付き眉をひそめた。

「…あ、ホントだ、なんだろ?」

「行つてみよ、ハル君、コップ頼める?」

「うん」

2人はリビングに小走りで向かつ。

「ねえ変な音したけど、どうしたの?」

「なんか厳罰がどうとか聞こえたけど……」

リビングでの騒がしい声にハルとモモは首を傾げながらキッチンから出てきて、部屋を出していく前と変わっていた3人の位置にさらに首を傾げた。ハルの手にはコップが5つ、両手で挟むように少しムリをして持たれ、モモの手には皿とフォークが5つ持たれていた。その極日常的な姿で先程リビングで起こった騒ぎとは全く関係の無い所に居た事がよくわかる。

アルは呆れたように頭を左右に振りながらどう説明したものかと言葉を詰ませた。

「ああ……モモにハル君……いやね……親父が……何て言つかその……錯乱して……」

うつ向いて目を閉じ、十数秒じっくりと考えた後、やつとやつとアルはソファーに倒れたままの勇護をちらりと見た。

第43話 時間はただ穏やかに

「厳罰口ワトイ 厳罰口ワトイ…………」

そこにはハルの言葉に反応して錯乱し、丸まって震える勇護がいた。ハルとモモは何が起こったか理解できず目を丸くしている。

「はあ……またかよ……ッセイ……！」

その姿をみたアルはあからさまなため息の後に脚を大きく振り上げ、踵落としを見舞つた。

「へふっ！？」

勇護はアルの踵が脇腹に入り情けない声をあげて氣を失つた。静かになつた室内に、庭で歌うようにさえする鳥の声が響いた。

「まあ……こんな感じだつたんだ……わかつた？」

「…………昔勇護さんに何があつたのよ……？」

「…………昔勇護さんに何があつたんですか……？」

2人はかなりいぶかし気な顔で当然の疑問をほぼ同時に呟いた。

「さあねえ、俺は知らないよ……まあ……聞かない方がいいんじゃない？」

「聞いじつとしたら」ことになるからムリだよ、聞けない。」

「まあいつか、皆、こんなオッサンほつといてケーキ食べよつ」

「…そだね、丈夫な人だから大丈夫だよね。」

「たしかに勇護さんは丈夫そうですが…いいんですか？」

「息は……してるね。大丈夫。先に食べてよつ。話さなきやなんない」とあるし

「そだね、3人共好きなの取んな」

薄いレースのカーテンから漏れでる暖かな光を浴びながら気絶し続ける勇護を放置して4人はケーキを食べだした。

「ええ！！？今回のサポーターが勇護さん！？」

「そつらしいんだ、てゆつかモモ、こんなに騒いだ後でよく驚けるね？まあ詳しくは親父が目を覚ましてから話して貰おう。」

4人の内モモは1人だけ驚いて声をあげた。ハルはサポーターについて詳しくは知らないらしい。フォークをくわえて首を傾げる。アルはというとモモの反応にも落ち着いてケーキを食べ続けていた。隣では今回のサポーターがまだ情けなく氣を失つて、時折悪夢をしているようなうめき声をあげている。

その後、時間は穏やかに過ぎて行つた。

第44話　去った親父と来たメール

結局勇護が目を覚ましたのは4人がケーキを食べ終え暇を持て余し始めた頃だった。アルの華麗な睡落としが決まつた方の脇腹を手で押さえ

「後でそこパソコンにメール送つとくから見といてくれ」と言ってフラフラと去つて行った。その顔はかなり憔悴していた。開いた扉が勇護を隠しきる寸前に

「威儀が……」と言つ悲しげな咳きが聞こえた。

「モモ、パソコンに電源いれといて、ところどころ大丈夫なのかあのオヤジがサポートーで……」

「明日までショックを引つ張つてなきや大丈夫よ……多分……」

「不安だね……」

「不安ですね……」

唯一不安を感じていなかつたハルも3人にサポートーについての説明を聞き、不安を感じだしたようだ。その時、

『 ピピピピピ ピピピピピ ピピピピピ』

つい数分前に電源を入れられ低い唸りをあげていたパソコンが軽い電子音をあげた。

「あ、メール……あんだけ疲れてたにしては早すぎない?」

アルは疲れからかいつしもより物事に不信感を抱きやすくなっているらしい。

「ホントだ、早いね。開けるよ、え～っと……『明日のサポートは勇くんと私でするからヨロシクネ。内容は基本的には状況を無線で連絡すること、有事の際の狙撃の2つだけです。』『だって

「あ～母さんか……」

「あ……アル、まだあつた。』追伸、勇くんがなんか落ち込んでるけど心当たりがあるなら私の部屋に来なさい、久し振りだけど逃げたらどうなるかは覚えてますか?』『だつてや、ねえ……』『こつてもしかして……』

モモが油のきれた機械の様な動きでゅつへつと振り向くと

「ヤバい……ヤバいヤバいヤバい！……ビリヒナヒモモー……

第45話 あぐまでも『見た目は』

そこには父親に負けず劣らず取り乱しているアルの姿があった。頬を汗が一筋流れ、目の焦点がさだまつていらない。

「ななな…なに怖がってんのよーだ…大丈夫!!かなたサン優しいじゃん!!早く行つてきなさいー」

「早く行かなくちゃかなたさんがコッチに来るよー?」

モモは

「大丈夫」と言いながらもかなり焦つて、和秋はいつも落ち着いた静かな喋り方ではなく早口で言つた。

「……こうなつたら……」

アルは小さな声でそう呟くと窓をキッと睨んだ、窓の外では休憩中の隊員がベンチに座り世間話をしていた。焦りなど無縁な場所にあるとても平和な風景だ。アルはその平和な世界への逃避の為に歩き出した。

後、一步。後一步で自由な世界に行ける。問題を棚上げにして希望に満ちた足取りで窓に向かい歩き、たどり着いた。意気揚々と窓を開くアル、しかし窓を開けた瞬間、その顔は絶望に染まつた。

「外に出ちゃったら私の部屋に来れないんじゃないかな?」

そつ言いながら開いた窓から部屋に入つて来た女性はアルの服の襟首を掴んで3人に向き直つて

「借りて行くね」

と綺麗な笑顔で言つとアルを半ば引きずる様に扉に向かって歩き部屋を出ていった。その間アルは一言も喋る事ができなかつた。

「……あの人があなたさん?」

扉が静かに閉まる音が嫌に大きく不気味に響いた部屋の中でハルは誰にともなく質問をした。

「…そうだよ… 優しそうな人でしょ…？怒つたらコワイんだよ、意外でしょ？」

その質問にモモが若干虚ろな感じの声で答えた。優しそうな人と言う前の間に

「見た目は」と聞こえた気がした。確かにかなたは優しそうな外見をしていた。見た感じは線が細そうな外見で華奢で身長は低い、瞳は大きく透き通つていて長い髪は風が吹けば美しくなびくし、肌の色も白い。

ただ底知れない何かを感じる。

結局、アルは3時間程後になつて戻つて来たがその日には涙がたまつっていた。

第46話 誤解です、お母さん。

翌日～早朝～

「起きてー緊急事態ーーー！」

昇りきっていない朝日が弱々しくも力強い光を放つほの暗い早朝に、予定よりもかなり早い時間に4人が眠る客室にかなたがノックもせずに飛び込んで来た。切迫した表情でアルのベッドに駆け寄ると掛布団を掴んで放り投げる。

「ん~……」

そこにはアルとモモが丸くなつて眠っていた。かなたは目をしばたかせて数秒固まつた後でアルの胸ぐらを掴んで引き起こし

「モモちゃんに何してんのーーー！」

と大声で叫んびながら引き起こされた時点で目を覚ましていたアルが何か喋ろうとしているのを無視して力強い張り手を頬に叩き込んだ。その後かなたは

「何もしてない」

「誤解だ」

「モモが勝手に入つて來たんだ」

「どうしてこんな早くに母さんが『コニーいんの?』と言つアルの言葉を無視し続けた。

他の3人が目を覚ましてかなたをやつとの思いで止めたその時

「かなた！早く！！」

そう叫びながら大きな台車を押して勇護が部屋に入つて来た。勇護は馬乗りになつて息子の悪戯を怒つている感じの妻とその妻を3人がかりでとめている同じ部隊の仲間、という早朝の不思議な風景を華麗にスルーして部屋に入ると4人の荷物を集めた。

「緊急事態だ！標的が　ツ詳細は飛行機の中で話す！！飯は機内だ、今すぐ3番ゲートに集合！」

と言つと集めた荷物と息子から引き剥がしたかなたを台車に乗せ走り去つて行つた。

4人は大急ぎで服を着替えると黒いブーツを履いて装備とは別に枕元に置いてあつた拳銃をホルスターに入れ、予想外の事態に早朝から慌ただしく動き始めた基地の中を空港の3番ゲートに向かつて走り出した。

第47話 焦りと苛立ち

「あ、来たー乗ってーーもう飛べるからー早くーー！」

エンジンがかかったままになつた染赤の隣で葵が叫んでいる。

「荷物は？」

駆け寄つたアルが尋ねる。

「もう勇護さんが全部積んだ、それより早く乗つて」

葵は『緊急事態』の詳細を知つてゐるのだろう、かなり焦つてそれだけ言つと自分は操縦席につき管制塔と連絡を取り出した。4人が染赤に乗り込む。

「管制塔、こちらHE・染赤。いつでも飛べるー。」

葵が無線機にむかい叫んだ、連絡した先から返事が返つてきた、無線から声がもれる、かなり大きな声で喋つているらしい。

「こちら管制塔！ S・F・染赤、S・F・散香、共に移動終了して
いる、ランに支障はない、飛べー！」

「了解ー。」

葵がスロットルを押し上げると今まで暖氣されていた染赤のエンジンは一気にふきあがり染赤を前に押し出しスピードをあげる。

「テイクオフ、行つてくるわ」

「幸運を祈る。早く戻つて来いよ。」

唸りをあげながら高度を上げる機体の中でかなたが4人に食事を手渡し勇護が荷物から任務地の模型を引っ張り出した。

「敵の拠点がココだ、」

勇護がヘルメットに『E』と彫られた小さな人形を3体、一回り小さい人形を1体、模型の端に無造作に放る。

「で、運の悪いことに深夜に人数が増えた。ザツと100だ、今までのと合わせると約135。人数が揃う前に落としたかったんだが……早くしないと同盟国にケンカふつかれられるんだ。」

そう言うと人形を模型の下の引き出し部分から10体取り出してまた無造作に放った。普段はひょうひょうとしている勇護の動作に苛立ちが感じられた。

第48話 作戦概要

「だけど基本的にやることは変わらないの、アナタ達は作戦通り気づかれないように敵戦力を徐々に削る、これでいいわ。注意しなくちゃいけないのが予想外に出てきちゃった敵の飛行機、旧式だけど爆弾なんて落とされたらひとたまりもない…」

かなたがヘルメットにWPMと彫られた人形を優しく置きながら言った。

「で、あいつらの出番だ、俺達が戦力を削つていけばいつかはバレる、そうすれば敵も飛行機を飛ばして俺達を消しにかかる、その戦闘機を後から飛び立つあいつらがなるべく引き離して撃ち落とす！――名前はこの任務が終わったら自分で聞いてくれ、あいつらなら絶対に死なんから。」

模型を移動させながら任務を説明し終えた勇護は
「ほんじゃ、各自で準備してくれ。」と言つと自分のバックパックの中身を確かめだした。

「6人で……135、ですか…」

「……多いね……一人頭21だね…」

「多いなあ……あ、コーヒー飲みたい…」

「……はあ……呑氣でいいね…」

日々に不満の言葉をこぼしながら勇護に倣つてバツクパツクの中身

を確認する。

時々、染赤の中に置いてある大きな木箱に無造作に入っている弾丸やピンがしつかりとビニールテープで止められた手榴弾をバックパックに移す。弾丸には普通の弾丸と先端が赤や青に着色されているものがあった。

「…………さつき『HE・染赤』とか『S・F染赤』『S・F散香』って書いてたけどHEとかS・Fとか、どういう意味なんですか？」

ふとハルが荷物確認の手を止めて疑問を口にする。

「そっか、ハルはまだ知らないんだ……HEは本部つて意味でS・Fは南部基地のファイター、所属と戦闘タイプなんだ、ファイタートカアタッカーとか、区別の仕方は……つと、これはまた今度。

和秋が珍しくなめらかに話す。

「へ～……所属と戦闘タイプ……和秋、詳しいんだね」

「バカ姉が飛行機乗りだから」

「そつか、葵さんの弟なんだ……大変だね……？」

「…………うん、大変だね。あ、迫られたら張り倒していいから」

「迫られツー？……つてどんなふうに……？」

「聞きたい？」

「あー……いい、また今度」

「賢明だね」

少し笑いあつてまた荷物に目を落とした。その時、操縦席では葵が

小さな声で

「聞こえてるからね」と言っていた。その声は誰にも聞こえない。

第49話 着陸と発砲音

「皆、降りるよ。」これ以上近づいたらバレる。てゆーか森に入つて降りれなくなる

「ああ、わかった。」

短い会話を交して徐々に高度を下げる。遠くの森にカモフラージュされた建物が見えた。

「分かつてたけど結構遠くに降りるんだね……」

「それはしょうがないわよ、それよりアル、着陸したらコレ染赤に被せてね」

「カモフラ?」

「そり、念のためにね。急だつたからただのグリーンシートだけど、無いよりマシだしね」

「おーい、もう着陸するよ、低高度だつたからいつもより早いよー、舌噛むから喋らないようにね……3…2…1…タッチダウン……はい止まつた。基地に連絡入れるから先降りてて」

「了解」

葵以外の全員が染赤から降りてカモフラージュ用のシートを準備した。

「終わったよ、シート被せて」

連絡を終えた葵がステップを降りながら言った。

「あいよ、俺が上登るから投げてくれ」

「わかった」

勇護は染赤に梯を立掛け、登る。アルは畳んだままのシートを勇護に投げた。勇護はシートを開けると端を持って下に居たアルとハルに投げ落とした。それを広げて固定するまでに一分とかからなかつた。

「おー、やっぱり速いね特殊部隊。」「

「んなこたあいいから、バイクは?」

「今から出すよ、ハル君手伝って?」

「あ、はい」

任務地に向かう為の足を用意するために葵に駆け寄るハルを心配気に見送る和秋、少し迷つて自分もバイクを出しに行くコトに決めた。その時、乾いた発砲音が辺りに響いた。

第50話　被弾、撃退。

「ツーーー？」

その場にいた全員が身近な物を遮蔽物代わりにして身を隠し、ハルはスナイパーライフルをハル以外の全員が拳銃を手にする。アルと勇護はマガジンをグリップから落としそれぞれ薄いピンクと鉛色のマガジンを装填した。アルは眼帯を外している。

モモは左手をバックパックに手を入れ円形の機械を取り出す。

「和秋ーー！」

勇護が叫ぶ。

「分かつてるーー！5時の方向！おそらく1～3人！負傷無し、9m弾のただのハンドガン。確認頼む！」

その声に対しても明は敵の方向、人数、武器のおおまかな情報を伝える。

「モモちゃんーー！」

かなたがモモに声をかける

「2人ーー！」

モモは手に持ったアクティブソナーで正確な人数を伝える。

「かなたーー！チャフー！」

「もう投げた！」

地上15m程の位置でくぐもつた比較的小さな爆発音が短く響くとキラキラと光る薄い金属片が辺りに舞った。

森から乾いた発砲音が響く。

迷彩服を着た人間が2人飛び出してきた。飛び出した後の慌てた動作にも身長にも幼さが感じられた。

「梓！撃て！…」

「あいよッ！…！」

2発分の発砲音が響き幼い（？）2人はその場に力無く倒れた。ハルが沈痛な表情でうつ向く。

「つあ〜……緊張したあ……私こいつの苦手なんだよね」

葵が拳銃を腰のホルスターに戻しながら森の木の影からスッと出て来た。倒れた2人に近づく。

「ハル君、繩取つて。木箱の端に架つてるから。あと弾入つてる袋も、麻袋、おんなじトコにあるから。」

「わかりました。けど繩なんて何に使つんですか？」

「！」の子ら縛んの、ちなみに趣味じゃないよ

葵は倒れた2人の襟首を無造作に掴むと引きずりながら染赤に向かい歩く。やはり2人共幼い。

「え…？ その子達をですか！？」

ハルは驚いた。死体を縛る「ト」になんの意味があるか理解出来ない。

「そもそも、ギュッと縛つてグイッて。ハル君勘違いしてるかもだけど…生きてるよ？」

「…え？」

第51話 知ってるか？

葵にそう指摘されて注意して見ると胸が静かに上下している上に弾丸が当たった額からは血が流れず青痣が出来ているだけだ。

「……眠つて……る……？あ、アルさん、縄」

「そう、情報も出来るだけ手荒な方法を使わずに欲しいしこんだけ離れてたらもしかしたら今回の標的じゃないかもしね。お、サンキュー。それに、もし今回の標的じゃないなら俺達を狙つた理由も知りたいしね。さて……」

そう言うと眼帯を着け直したアルは手早く2人を縛りあげた。正座で手を後ろに回された状態で手足をがっちりと固定させている縄は芯に細い鋼鉄のワイヤーが入っている丈夫な物で、道具を使わなければ人間の力で切ることはまず不可能だ。

「よつし！起こすか、和秋、その辺に倒れてて、交渉がしやすいから。アオちゃん、和秋の上脱がせて包帯をなんかで赤くして巻いて、モモ、水ちょうどい」

「オッケー！任せて！――！」

「嫌な役……アルめ……覚えとけよ……」

「はい、無駄使いしないでね」

「ん。サンキュー、」

アルは和秋に倒れるように指示すると縛りあげた幼い2人の内歳上と思われる方の頭から服を濡らさないように気を付けながら水を被せた。

「…………ん…………う…………？」

水を被つた少年は焦点の定まらない虚ろな目で自分達を撃つた張本人を不思議そうに見つめる。

「やあ少年、おはよっ。気分はどう?」

「…………ん…………怒りに……燃える……高潔な……蛇を知、つて……るか…………？」

アルのフレンドリーな問いかけに寝惚けた幼い少年は半分寝言のような小さな声で質問をしてきた。意味の分からない質問をしたあと少年は、また眠そうに黙り込んだ。

第52話『The third root』

「蛇い？なんの」ひかりや……寝言……じゃねえよな？」

勇護がマガジンを戦闘が始まる前のモノに戻しながらあからさまに眉根を寄せる。

「ん~……あ、合に言葉だーほり、合流隊に変なのが混ざりな~いようにーー!」

かなたは気が付いた、と言ひよつに勇護を指差し誇りし氣に満ちて。

「やついえば増援来たんだつたね、母さん今日は泳えてるねえ、どうしちゃつたの」

「んふふふ~」

アルの取り方によつてはイヤミニに聞こえなくもない言葉に軽やかに微笑んで胸をはる。元々若く見えるが誇りし氣にしてくる姿は幼さえ感じる。

「で?どうこいつ意味?」

一応の期待を込めてアルが尋ねる。

「…………ん?……ふふふ…………専門外……」

「…………んまあ……そんなコトだろ?と思つてたよ……とにかくー合に言葉解読の専門家なんて居ないんだから早く答へ見付けなきゃ」

皆普段と変わらない口調で会話するが表情が微妙にかたい。眠っている少年達が目を覚ます前に呑い言葉の答えを見つけ出さなければいきなり撃つて来るような相手に情報を平和的に聞き出すコトが出来ないからだ。

「……なあかなた、今回の敵の名前は？」

「ん？ 大元は『ユグドラシル』、で、今回の敵は分隊みたいな感じの『The third root』、つまり『第三の根』って意味ね、よくわからんない名前よねえ？」

「『ユグドラシル』…………『第三の根』…………？ またそんなく分かんない名前つけて……呑い言葉のヒントになんないのかな……」

アルがうつ向いて蒼い右目の上につけられた眼帯を人差し指でコツコツと叩く。考える時の癖らしい。

「あの、勇護さん、かなたさん、アルさん。もしかしたらですけど」

ハルが3人に向かつてそこまで言つた時

「おーーおまえたち何者だーー弟になにしたーー？」

眠っていた少年が完全に目を覚ました。

第53話　『一ノズヘッグ』

「大丈夫、寝てるだけだよ。コレ、睡眠弾。ヒュプロスブレットよ。私達の仲間は少し危険な状態だけど……アナタのお名前聞いていいかな？なんで私達を襲ったの？」

いきなり叫んだ少年に動じずにかなが勇護が銃から取り出したマガジンを受け取り、少年に見せながら怒りを含んだ声を作つて話かける。

「……怒りに燃える高潔な蛇を知ってるか！？」

少年はかなたの問いかけを無視して合い言葉だらうと思われる言葉を口にする。隣にいる自分より幼い少年が眠っているだけと分かつても少年は怒る事をやめない。

「ふざけるな！！アイツを見ろ！！！俺の弟だ！！もうダメかも知れないんだ！言え！くだらない理由なら2人共撃ち殺してやる！！」

アルが普段聞いた事の無い激しい口調で縛られて動けない少年に詰め寄る。上着を脱がされて腹部に赤く着色された包帯を巻いて倒れた和秋を左手で指差し弟だと主張している。右手にはハンドガンが握りしめられていた。演技だとは思えない程の怒りを感じる。

「……！怒りに燃える高潔な蛇を知ってるか！？」

少年は『俺の弟だ』『撃ち殺してやる』と聞いた時、確かな動揺を示したが合い言葉を繰り返す。

10数秒の沈黙の後、少年がアル達を睨みつけもう一度繰り返す。アルが少年に見える位置で右手のハンドガンに初弾を手動で装填した。

「もう一度だけ言つ！怒りに燃える高潔な蛇を知つてゐるか…？」

時間稼ぎともとれるタイミングで少年が3回目の命に言葉を言つ。ハルが静かに少年に向かい、動いた。

「……『一ノズヘッグ』。ねえ、僕達は敵じゃ無いんだ。全部君の勘違い……君達の名前、教えてくれる？」

第54話 蟻川春樹

「……え……合ひ言葉……？仲間……なの！？」

『二一ーズヘッグ』と言ひ言葉を聞いた少年はアル達を睨みつけていた目を丸くした。怒りで激しかった口調も幼くなる。

「お前ら……『third root』の人間なのか…？ならなんで撃つた！」

アルがさも合い言葉を知っていた風に話を合わせ怒っている演技を続けながら少年に詰め寄り胸ぐらを掴み問い合わせる。

「ひツ…！…？ごめんなさい！お父さんにこの辺で武器持つてる人は敵だから攻撃しても構わないって言われたから……」

少年は敵だと思っていた人間が仲間だった事に安堵し、同時に仲間を攻撃した罪悪感を感じている。安堵感から口が軽くなり少なくとも死に対する恐怖が消えた事でアルに対して恐怖を覚えていた。

「アル、離しなさい。私達は仲間よ、そしてそこで倒れてるあの子も仲間。……ねえ私達本隊に合流したいの、作戦はまだ始まつていよね？あ、その前に、アナタのお名前は？」

アルは怒つてではなく演技で小さく舌打ちして手を離した。

「春樹、蟻川春樹です……弟は慎吾…」

春樹と名乗った少年は目に涙を溜め声を震わせている。

「ゴメンね、怖がらないで。春樹君。私は八坂かなたつていうの。で、さつきから黙つてるのが八坂勇護、怒鳴つてるのが八坂梓、そこで倒れてるのが八坂和秋、で、介抱してるのが泉百恵、合い言葉を言つた彼は柊陽菜、本名だよ。アナタ達は仲間だから。よろしくね。あ、あと和秋は大丈夫。傷は浅かつたから、梓が大袈裟に言つちゃつてゴメンね？」

かなたちは和秋の苗字だけを偽つて自己紹介をした。本名を教える事で親近感を湧かせ、自分が撃つた人間の傷が浅かつた事を知らせ安心させ、自分達を完全に『仲間』として認識させようとしている。

第55話 質問

「あの…… むろじく…… お願ひします。」

春樹がおずおずと挨拶を返す。

「さて、皿几口紹介も済んだし……教えてくれる? 今本隊はどこへもう出発したの? あ、それと無理に敬語にしないでいいから。」

「……はい……まだ拠点に居るはずです。たしか11時に『香南』に着くよ」として聞いたから9時くらいに出発だと思います。」

「今は……7時30分か……急がないと……」

今まで黙つて倒れていた和秋が横になつたまま左手の腕時計を確認して言った。右手で腹部を押さえている。

「和明一もつ大丈夫なの?」

「うん……なんとか大丈夫そうだよ、『母さん』。」

一息ついてフラフラと立ち上がり春樹に近付く。春樹は脅えて少し体を硬くしたが安心感が勝つているらしく表情に安堵がうかがえる。

「話は聞いてたよ、春樹君。僕達は急ぐからもう行くけど最後に聞かせてくれない? ……君達の親は……もしかして実の親じゃない、それに君達は銃を撃つ訓練をろくにしてない、違う?」

春樹の目の前に移動した和秋がきつく結ばれた縄をほどきながら静

かに聞いた。

「！？……なんでそれを？」

春樹は目を見開いて和秋を見つめる。その目を真っ直ぐに見て、つづく質問をした

「実の親なら、ろくに訓練をうけてない子供に敵を殺せなんて言わない、逃げろって言う。ねえ、今まで育ててくれた人や『thirsty root』の人は大事？」

「…あの人達は人殺しだ。それに…僕らは…虐待されてた…それに捨てられた。行く当てもないんだ…だから…大事では…無い…」

悲しそうに縄のほどかれた手で膝を抱える。

「…そいつが、行く当てが無いならいいと…」紹介してやる。口上でじつとしてりやあ俺らの仲間が来る、そいつらにお前らの「口伝」といってやるからそいつらに頼れ。また俺らの基地で会おう。」

勇護が座りこんだ春樹の肩に手を置いて力強く言つた。眼には涙が溜まり声は震えている。

あつけにとられた春樹はただポカンとした顔で勇護やその周りにいるかなたや和秋、アルを見上げている。

「俺達はもう行くから、後は自分達で考えて、自分達で決めるんだ。じゃあな」

アルはまだ眠っていた慎吾を縛っていた縄をほどくと木の根元に放りながら言つとバイクに歩み寄つてエンジンをかけた。

第5・6話 眉間のシワが戻らない……

「つあーーーあの顔と口調！疲れたーーーやっぱり普段と違つよう
にって神経使うねえ、ねえハル君？」

春樹と慎吾と別れて1分程して2人の姿が見えなくなつた時、アル
が左手で自分の頬を軽く引っ張りながらサイドカーに乗つたハルに
声をかけた。

「そうですね、皆は普段通りの口調だつたから大丈夫だつたけどア
ルさんは大分キャラ作つてたから……お疲れさまでした。」

「普段があんならぬ、倒れたまま聞いてて笑いそうになつたよ

ハルが勞う様な笑みを浮かべながら言つたのに対してもシート
に座つた和秋は舌を出して両手を上げて降参のポーズをする。

「るせえ、倒れてただけのヤツにやあ分かんないよ。それにほれ、
親父見てみ？」

指差した先には勇護が運転するバイクがある。サイドカーにはモモ
が後ろにはかなたが乗つている。

「…？別にいつもと変わらないけど？」

和秋はいぶかし気に言つ。

「その位置からは見えないか……よし、この位置から見てみ、」

少し加速して前に出る

「……」

無言でバイクを運転する勇護は左手で眉間にマッサージするように揉んでいた。

「な？ 眉間にシワが戻らなくなってる、親父は普段あんなだからなあ…ま、普段と違う」とするつてのは難しいって事だよ。」

「アル、あとどのくらいで着くの？」

和秋が露骨に話題を変える。

「……親父はいいのかよ…まあ別にいいけどさ……到着はまだだよ、40分はかかる。向こうでは時間も無いし打ち合わせしどく？」

「大丈夫、ちゃんと覚えてる。それに打ち合わせは全員でしないとあんまり意味ないしね。それより…あの2人大丈夫なのかな……」
和秋が不安そうに眉を下げる。

第57話繋がらない

「あー…大丈夫なんじゃない?しつかりしてたし、アオちゃん残つてるし、後で南のパイロットも2人来るし。完璧だよ、非のうちどころがない」

「忘れてた、今心配事が一つ増えたよ…」

軽い口調でアルが返した安心させようと言つた言葉が違う種類の不安を和秋に与えたようだ。

「…大丈夫だよ、和秋、葵さんも時と場合をわきまえ…てくれたらいいね…」

和秋の不安の原因を察したハルが励まそうとするが早朝の出発の時に初対面の自分に言ひよつた女性を思い出しても單なる希望として終わってしまった。それがさらに不安を煽る。

「葵が犯罪者…ありつむ…どうしよう…不安だ…」

「…そうだ!無線いれてみれば!…?」

小さな声で呟くように言つ和秋にハルが提案した。

「それだ!さすがハル!アル、チャンネル教えて!今すぐ連絡する!…!」

「あいよ、え~と確か…112・7だったかな、てゆうかアオちゃん無線切つてたりして」

「いくらなんでもそれは無いですよ、任務中な

「…ねえ…2人とも…?え…?嘘だよね…繋がらない…どうしよ

う…」

アルが笑いながら言った「冗談にハルが樂観的、と言つより当たり前の意見を笑いながら言おうとしたが和秋が青い顔で言葉を被せた。3人の会話が止まり全員の顔がひきつり青白くなつた。

「……少年よ…お姉さんを信じなさい」

短い沈黙の後、アルがそう言つた。その後無言で時間は過ぎ、整備されていない森の悪路を走るサイレンサーを通して小さくなつたバイクのエンジン音だけが静かに響いていた。

第58話 忘れ物

無線での通信に失敗して無言で走ること約30分、アルがバイクを止め双眼鏡を覗いた。

獣道に木が少くなりだし道も一応、と言つた感じではあるが草が抜かれ土を固めた道になっていた。木々の間から600m程向こうに縁に塗られた2階建ての建物が見える、中心に何があるかは見えないが、円形で、屋上には機関銃が据え付けられていて建物の周り200mは円形に木が伐採され遮蔽物が何も無く所々に塹壕が掘られている。

「ふー…大体この辺だね、親父達はもう配置についてるだろうから俺達も急ごう。行くよハル君、和秋また後で。モモをヨロシク」

バイクのエンジンを切つてアルが2人に話しかけた。森に響いていた小さな反響音が消え、代わりに森特有の木のざわめきが聞こえる。

「わかった、任せといて。そっちもしつかりね。ハル、アルをヨロシク」

和秋はサイドカーに積んだ荷物を降ろして背負いながら言った。和秋が手に持つた荷物は細長くとても大きい。

「……俺…一応この中で一番先輩なんだけど…」

「そうだったね、ごめん。じゃあアルをヨロシクね、ハル。待たしちゃ悪いしもう行くよ」

アルは和秋の言葉に不満を口にした。それに対して和秋は自分の荷

物を全て持ちアルに謝った後、もう一度ハルに声をかけて走り始めた。

「ワザとだなんにやろー……まあいいや、帰つてからシメる。行こうハル君」

そう言つとマルは苦々しい顔とも笑顔とも取れる顔で歩き出した。

「うん、あれ？…これ？」

ハルが後部座席に吊りさげた自分の装備を詰めた鞄を手に取った時、サイドカーの出っ張りに引っ掛けた分厚いペンダントを見つけた。銀で造られたそれはシンプルで、どことなくそつけなく、そして美しい。

「おーいハル君、どつたの？」

「あ、ごめん。なんでもない」

なんとなく手にとつてペンドント眺めていたハルはアルに声をかけられ半ば反射的に何も入れていない胸ポケットに入れた。

第59話 行こう。

走り始めて数分、2人は木の残っているギリギリまで近づいた。木の上に登り、アルは双眼鏡を取り出して遠くを、ハルは近くを見て敵の存在を確認する。

その時、建物の近くの塹壕の土が少し盛り上がり、そして開いた。

「…うわ！地下から出てきた！？」

アルが双眼鏡を覗きながら小声で驚き、同時に無線機のスイッチを押して状況を説明する。

「敵を視認。人数4人、建物から約5mの位置、塹壕には普通地下から入るのか…巡回し始めた。…塹壕は所々繋がってる。建物からの監視は無し。以上。」

「了解。こっちも確認した。狙いつけとくから安心して」

「私たちはもうすぐ潜入出来るから連絡待つて、通信終わり

アルは通信を終えた無線機から手を離し小さく溜め息をついた。

「…俺達も行くしか無いか…いい？ハル君」

「はい！行きましょう！」

アルが敵の存在を確認して一番近い塹壕まで走り、飛び込んだ。

「うわ！？思つたより深いな…ハル君、大丈夫だった？」

「はい、けど…上の様子は分かりません……」

ハルが少し悲しそうに言つた。塹壕の深さは約1・5m、平均かそれ以上の身長の大人が屈めば敵からは見えず中からの視界を損ねない高さに掘られている、しかしハルにとっては高すぎるらしく背伸びしても頭の先も出ない。

「…あー……背なんてすぐ伸びるよ…」

背が高いアルが頭が塹壕からほみださない用にしゃがんで、直立しているハルに言つた。

「…………そうですね!!」

「そうだよーそれに今は敵に見つからずに普通に動けるから逆に有利だし!」

「…………そうですよね!!!!じゃあいきましょー今すぐいきましょーうーー」

アルに背中を向けて田を服の袖でゴシゴシと擦つて上で確認した敵の位置まで速足で歩く。アルは屈んだまま急ぎ足でついていったが速足で歩き、アルよりも軽いハルについていくのがやっとだった。

第60話 フーム

「ハル、こちら和秋。歩くの速いよ、アルと離れ過ぎ、ちょっと止まつて。」

上から敵の位置を知らせていた和秋がハルの異変に気づき無線で呼びかけた

「あ、ごめん。」

無線を受けてやっと自分がアルを置き去りにしつつある事に気づき足を止め、アルが追いつくのを待つた。

「ハル君、速い、危ない、疲れた、」

中腰で足場のよくない塹壕の中を急いで歩いたアルは少しあがつた息で途切れ途切れに喋る。

「すみません。ちょっと…なんて言つか…すみません…」

「いいよいよ。けどこれからは落ち着いてね」

バツが悪そうに言葉を濁すハルにアルが軽く笑いながら言った時、無線から和秋の声がながれた。

「ちょっと黙つて！！目標接近！1つ奥の塹壕に2人来た、もし次の角曲がつたら接触するよ。急いで準備して！」

「マジか！？了解」

「了解」

通信を受けた2人は急いで曲がり角の出口に、左右にわかれて張り付き、アルは右股に付けたシースから刃渡り15cm程のコンバットナイフを抜き取り右手で逆手に、ハルは出発前に玄慈に渡された小太刀の様な刀を右手で握り、構えた。いつ来ても対応出来る体制を作つて待つていたがなかなか敵が来ない、その代わりに、声が風に乗つて流れてきた。

「…まあ新入り」

「んー?なんだ新入り」

「どうして見回りなんかしなくちゃなんないんだ?バカ野郎」

「そりやお前敵が来たらダメだからだろ、バカ野郎」

「……敵が来た事つて今まであつたのか?キチンとショボく偽装してんのに」

「記録によるとない」

「なあ……どうして毎日見回りなんかしなくちゃなんないんだ?」

「そりやお前敵がいつ感づいて来るか分からないからだろ、地下の『ファーム』が見つかってみろよ、やべーだろ?」

「あー『ファーム』はヤバいな、そつか……じゃあ結構重要な仕事なんだな」

「ああそうだ、分かつたらしつかり見回つて早く中帰つて一服しよ
う。」

「そうだな」

立ち止まつての会話が終わり、ようやく見回りを再開した2人の兵
士風の男達が一本奥の塹壕に入るため曲がり角を曲がつた。

第61話 テウス・エクス・マキナ

角を曲がった瞬間、兵士風の男達の、左側の男の首から血が噴き出した。声を出す暇もなく、驚いたような、理解できていよいよ、何とも形容し難い顔で崩れ落ちる仲間に声をかける事も叶わず、もう1人の男は口を抑えられ首にナイフを突きつけられた。

「大声を出さず俺の質問に答える。ファームってなんだ？」

誰が発したかも分からぬ声に戸惑い、地面に染み込みきらなかつた血で自分のまわりに血溜りをつくりながら次第に色を失っていく仲間を目だけで見つめながら辟易している男の目の前に、仲間の命を刈り取つた鋭利な日本刀がつきつけられた。鋭い切れ味のせいか、血はそれほど付着していない。

「……お前達は誰

「もう一度言う、ファームってなんだ？」

少し緩められた手の隙間からかろうじて出した声は冷たい、小さな声で遮られた。

「後5秒だけ待つ。」

「待ってくれ、俺は新米で何も知らないんだー！」

男は小さな震えた声で自分が何も知らないと主張する。

「3…2…1…、「

男の言葉を無視して進んだカウントダウン、数が少なくなるにつれて首に当たられたナイフが皮膚を押し、切つ先と接する部分から一筋の血が流れた。

恐怖心に支配された男は目を堅く閉じて歯を食いしばった。

「0。」

カウントダウンが終わつた、と同時に首からナイフが離れ男の太股を深々と突き刺した。

「があつ！？」

「5、4、3……」

情報を聞き出すまで殺すわけにはいかない。しかし主導権を相手に渡すわけにはいかない。その為、アルがとつた『最良』の選択。

「待て！待つてくれ！！話す、話すから止め　べツ！？」

「声は小さく。じゃなかつたか？新米テロリスト」

アルは

「話す」と言つた男に深々と刺さつたナイフの柄を掴んで左右に動かした。

「分かつた、分かつたから止めてくれ……地下では……『ファーム』では『デウス・エクス・マキナ』を育てている。俺が知つてるのはそれだけだ！本当に嘘じやない！」

「ありがとうございます。ごめんなさい。次はきっと、幸せになつ

て下さい。『めんなさい、ちよつながら。』

「……え！？」

男が人生の最後に発した言葉は単語でも何でもない、自分の状況を理解しきれない男の喉から反射的に出たただの音だった。首から血を吹き出して倒れる男を、アルとハルはただ、見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3616c/>

そして少年は引き金を引く。

2010年10月12日14時57分発行